九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

薬の想像力 : ケニア海岸地方ドゥルマの妖術とムハッソの観念

浜本, 満
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 : 教授 : 文化人類学

https://doi.org/10.15017/20031

出版情報：大学院教育学研究紀要. 13, pp.95-131, 2011-03-25. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2010，第13号(通巻第56集)，95-131
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.13, 95-131

「薬」の想像力：

ケニア海岸地方ドゥルマの妖術とムハッソの観念

浜　本　　満

1．はじめに

東アフリカの社会の多くでは，人に知られることなく他人に危害を及ぼす（殺すことさえできる）特別な手段があると信じられている。そうした手段がここで言う「妖術」であり，妖術を使うことのできる者が「妖術使い」である。妖術問題は，私が長年にわたって調査してきたドゥルマ社会における，人々にとってもっとも深刻で厄介な問題の一つである。人々が言うには，人間は嫉妬深い存在である。嫉妬あるいは羨望はドゥルマ語で chidzitso あるいは wivu と呼ぶ。誰かが何かを手に入れると，それが新たな子供の誕生であれ，収入であれ，新しい小屋の建造や，家畜の購入であれ，それを快く思わない者がいる。それどころか，単に人がつつがなく幸せに暮らしているだけでも，それを不愉快に感じる者がいる。我々にとってもおなじみの気持ちの良くない話である。嫉妬や羨望はまるで人類に普遍的な感情であるかのようだ。

しかしドゥルマの人々のあいだでは話はそれではすまない。こうした他人の幸せを快く思わない者のなかには，そうした他人の幸せを台無しにしてしまう手段を持っているものがいると考えられているからである。それが妖術 utsai であり，妖術使い mutsai は誰にも気づかれない仕方で犠牲者に攻撃をかけてくる。犠牲者はさまざまな不幸，病気や災難に見舞われるが，それがなぜ，どのようにして自分に降りかかってきているのか，けっしてわからない。自分や身内の打ち続く災難に不審を抱いた者が，占いに行くことによって，はじめてそこに妖術がかかわっていたことを知る。

妖術使いだと陰で噂されているような人物が，どの近隣（lalo）にも何名かはいる。しかし彼ら以外にも妖術使いは，まだ誰にも気づかれないまま身内や近隣に潜んで，普段はにこにこと挨拶を交わしたり，談話に打ち興じたりしながら，こっそりと攻撃を続けているかもしれない。こうした考え方をここでは妖術信仰という名前で呼んでおこう。

妖術使いの正体を突き止めたり，妖術に掛けられないよう備えたり，妖術に掛けられた場合にそれに対抗したり，妖術使いを告発したりするさまざまな実践が，こうした観念を取り巻いている。数年に一度は地域をあげての妖術使い狩り運動が盛り上がり，多くの人が共同体の敵である妖術使いとして告発され，追放されている（浜本 1991)。本稿では，妖術の観念の中核をなしているイメージの一つについて紹介したい。

妖術をめぐるイメージの３つの核

妖術とその行使についてのイメージには，方向性や焦点の異なるイメージが混在している。明確に切り離して考えるわけにはいかないが，大まかに３つの方向性が区別できる。（１）高度な知識に基づいた特殊技術の一種としての妖術，そうした技術を所持し駆使する妖術使いというイメージ，（２）おぞましく変態的で異常な行為としての妖術，そうした異常な性向の持ち主としての妖術使いというイメージ，（３）誰にでもある動機からごく普通の一般人でもつい手を出してしまう ── それだけに厄介でもある ── 日常性の中に潜んだ行為としての妖術のイメージ，の三つがそれである。これらはいずれも地域の人々が妖術について語ったり思い描いたりする際の核となるイメージである。本論考で扱うのはこの三つのうち第一の核となるイメージである。

２．ムハッソ（muhaso）と妖術 ── 特殊技術としての妖術

２－１．薬（ムハッソ）の概念

特殊技術としての妖術イメージの中核にあるのはムハッソ（muhaso）の観念である。ムハッソは「薬」の一種である。「薬」とは，ここでは一応，それを適切に処方することによってなんらかの効果をもたらすことができる物質と定義しておこう。ムハッソは，ムレヤ（mureya）と呼ばれることもある。黒い粉末状で，通常は粉末のまま瓢箪や小瓶に保存される。ひまし油や蜂蜜などに混ぜられた黒いどろりとした液体として瓢箪に入れられている場合もある。後述するように，妖術にはムハッソを用いないものも多く知られているのだが，ムハッソという言葉はしばしば妖術とほとんど同義語のように用いられる。妖術使いの第一のイメージは，人に危害を与えうるこうしたさまざまの特別なムハッソとその使用法についての特殊知識をもつ者である[1]。

ムハッソについての特殊知識は単に特殊であるだけではなく，秘密でもある。その内容も入手経路も，誰でもが知りうるものではない。妖術によって引き起こされた事態（病気，その他の不幸）を治療（ku-lagula）する施術師（muganga）たちは，何種類ものムハッソを所持し，その知識も持っている。こうしたムハッソについては，彼らから正式に伝授してもらい，自ら施術師になる道がある。施術師たちは自分の所持してるムハッソがあくまでも治療のためのものであることを強調するし，それを妖術に用いる仕方についてもあくまでも無知を表明するのが普通であるが，多くの人々は彼らが妖術の知識ももっているのではないかと疑っている。施術師たちが所持していることが知られているムハッソとその知識は，ムハッソの底知れない秘密の知識のうちの，人々の目に触れるような形で現れているいわば氷山の一角であり，その正体が人々に知られることのない妖術使いが駆使するムハッソとなると，どんなムハッソがありそれらがどんな経路で手に入れたのか，誰にも見当はつかない。

知識は年齢とともに増えるものである。そのためか，ムハッソの知識はかつては年齢と経験を積んだ老人の知識だという通念があった。しかし最近は，おそらくその現金収入のおかげであろうが，隣国のタンザニアなどで妖術を習得して帰ってきたりしている若者もいるので油断ならない。「そ

うとも。よく言われているように，あちらの高地（タンザニアのサンバラ山地域）の方では，ムハッソを簡単に買えるのさ。そこでは男たちが今この瞬間にも料理されている（kunajitwa alume kuko ta vivi. ここでは「妖術使いとして訓練される」の意味)。」

２－２.「薬」の三角形

「薬」とみなされるもの全体の中でのムハッソの位置について一言触れておこう。

調査地域では「薬」一般を指す言葉は，スワヒリ語に由来するダワ（dawa）という言葉である。ダワには，もちろん診療所や売店で手に入る通常の医薬品も含まれる。ムハッソはこうした医薬品とも，単なる毒（sumu）とも根本的に異なるものと考えられている[2]。

重要な区別は，医薬品ダワや毒のように，誰が用いようと同じ効果を発揮すると期待される「薬」── これには医薬品のみならず土着の単純な薬草類も含まれる ── と，特定の条件下で指示された特定の効果を発揮するように，使い手によってコントロール可能であり，そうしたコントロールの知識の持ち主が用いて初めて効果を発揮する「薬」との間の区別である。ドゥルマの施術師たちが，屋敷の秩序の修復や，憑依霊や妖術による病気の治療に用いる「薬」のほとんどは後者であり，こうした薬は一般にムヒ（muhi）と総称される。

ムヒとはドゥルマ語では「木」を意味する言葉であるが，施術の文脈では施術に用いられる，飲んだり，身体に擦り込んだり，燻したり，浴びたり，身に着けたりして効果を発揮する薬一般を指す言葉でもある。実際，それらの「薬」の成分の多くは植物性である。ムヒの使用には，その原材料についての知識，調製の仕方についての知識，そしてそれに効果を発揮させるためのコマンド，つまり唱え言葉（マルミ marumi あるいはマココテリ makokoteri と呼ばれる）についての知識が必須である。

ムハッソは，こうしたムヒの一種であり，同じムヒでも，屋敷の秩序の修復に用いられる薬，および憑依霊による病気の治療に用いられる薬と，はっきりとしたコントラストをなしている。私は以前これを「薬の三角形」と呼んだことがある（浜本 2001: 313-314)。

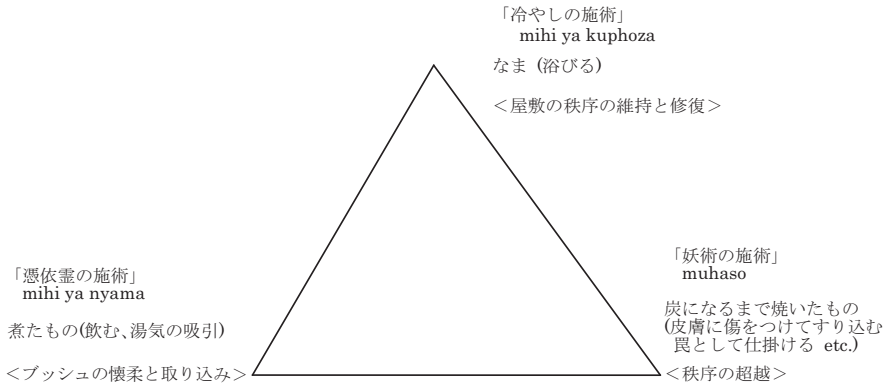

図１：薬の三角形

（1）性の序列の乱れや成員に生じた事故，死などで乱れた屋敷の秩序を修復する「冷やしの施術（uganga wa kuphoza)」に用いられる薬は，それに用いられる材料 ── 主としてブッシュから採集された植物性の材料であるが ── を生のままで熱を加えずに水の中で揉みつぶした薬液（vuo）の形をとり，その薬液で患者を洗ったり，屋敷に振りまいたりするのが，その施術の中心である。

（2）憑依霊による病気に対する施術（uganga wa nyama）では，それぞれの霊ごとに異なるブッシュの植物を用いる。それは上述の薬液の形で患者を洗うのにも用いられるが，壷に詰め少量の水を加えて火にかけ，立ち上る蒸気を患者に浴びさせる一種のサウナ療法や，材料を煮てその煮汁を患者に飲ませる処方が中心である。火にかけられて調理されるというのが特徴だ。

（3）最後に，ムハッソは，材料を鉄板や土器片の上で完全に炭化するまで炒め，それを細かくすりつぶすことによって得られる黒い粉の薬である。妖術使いが使用するとされる薬はもっぱらこうしたムハッソであり，妖術による病気や災いを治療する妖術の施術師（muganga wa utsai）が治療に用いるのもまたムハッソである。このように３タイプの施術は，薬の材料を「生のまま」使用するか，火にかけていわば「料理する」か，あるいはすっかり炭になってしまうまで「過度に料理する」かで，明確なコントラストをなしていることがわかる(3)。

ブッシュに由来する物質は，そのままの形で社会秩序の修復・維持に向けての効力をもつ。それは料理することによって，人間の社会秩序の外部の存在である憑依霊との交渉を可能にする。ムハッソは，ブッシュの本来無秩序の力の源泉をさらに徹底的な加工をくわえることによって，そのとてつもない危険でもあれば魅惑的でもあるポテンシャルを発揮させたものとして，イメージされているのかもしれない。ムハッソこそが，まさに妖術使いが行うとされる常軌を逸した不思議を可能にしていると考えられている。

２－３．ムハッソの不思議な力

人々がムハッソについてときに面白おかしく，ときに忌まわしげに話していることを聞いていると，ムハッソにはまるで不可能なことは何もないかのようだ。私が最初の調査の折りに滞在していた屋敷は，共通の父親が死んだ後も，すでに高齢に達した兄弟たちがその父親の名前を冠する巨大な屋敷のまとまりを維持していたが，屋敷の男たちの多くが屋敷の広場に焚き火を囲んで集まってとる夕食の時間に，彼らが孫や曾孫に対して自分たちの亡父についての思い出を語る場面がしばしばあった。「電気」というあだ名をもった彼らの父は，実は非常に恐れられた妖術使いであったというのだ。ある日，彼の妻たちが夕食のおかずにするものが何もないと彼に不平をこぼした。すると彼は，ちょっと待ってなさいと言うと，トビに姿を変え，遠くの町までひとっ飛びして，他人の屋敷の鶏を捕まえて帰ってきたので，自分たちはその日は鶏スープをいただくことができた。また月のない夜，父と二人でブッシュの中を歩いていたとき，父は人差し指に彼のムハッソをつけて，突き出した。それはまるで懐中電灯のように明るい光を放った。あるとき，父は友人たちがヤシ酒を飲んでいるところに出くわした。友人たちが彼に酒を差し出さないことに立腹した父は，何も言わずに立ち去ったが，父が立ち去ったあと，ヤシ酒はまだ採取して２日目だったのに，まるで４日

以上たった酒のように，醗酵しすぎてとても飲めない代物に変化してしまっていた。こんな話をしながら，俺たちの親父はいたずら者だったと大笑いするのである。

私の現在の調査地域の主要氏族の一つは，現在の屋敷の長たちの祖父を創始者とするリニージ分枝の人々であるが，その長たちは彼らの祖父カタンボ（仮名）について，その職業が奴隷狩りであったと明かしてくれた。彼は自分の姿を見えなくするムハッソを持っていたので，女たちが水場で水汲みをしているところに忍び寄って，簡単に彼女らを拉致することができた。あるときカウマ人の土地へ行って[4]，一人の女性を拉致してきたのだが，カタンボは彼女を売る代わりに自分の妻にした。それが俺たちの祖母なのだと，話し手は明かした。カタンボのムハッソは，話し手の父親ムトゥンド（仮名）に相続されたらしい。ムトゥンドはそのムハッソを自分の飼っている家畜の群れを守るのに用いていたという。ブッシュに群れを放置しておいても，それは誰の目にも見えないので盗まれる心配はない。またこのムハッソのおかげで，群れは置いておいた場所から動くことができないので，いなくなってしまう心配もなかった。ムトゥンドの息子たちは皆そのムハッソを継承することを恐れて拒んだので，その知識はもはや失われてしまった。

10年ほど前に死んだゴーヨ氏について，その死の様は多くの人々の話の種になっていた。彼も妖術使いで，ムハッソによって不死になっていた。肉体が死んでしまったのに，彼は生き続け，ついに身体が腐敗して蛆がわいているのに，まだ口をきくことができた。彼は息子を呼んで，こんな状態で生きていても仕方ないので，殺してほしい。だが，自分はムハッソで生きているのでムハッソでないと死なせることができない。小屋の屋根に上り，屋根材を一部はがしてその穴から私の胸に瓢箪の中身を垂らしてほしい。息子は，父の願いを最初は拒んだが，ついに拒みきれず言われたとおりにした。そのとたんゴーヨ氏は息を引き取った。このように肉体がとっくに死んでいるのに生き続けた人の話は，このゴーヨ氏以外にも聞いたことがある。

私の隣人の一人でもあった故キティ（仮名）氏も豹に変身できることで有名だった。別の隣人カリンボ（仮名）氏から聞いた話だが，カリンボ氏がキティ氏の家を訪ねた帰り道，ブッシュのなかで獣のうなり声がした。見ると木の陰から豹が自分を襲おうと身構えていた。一瞬恐怖を感じたが，すぐに気を取り直し豹に向かってキティさんだろうと問いかけると，豹はキティ氏の姿に戻り笑いながら「なるほどお前は本物の男だ。もし私だと見破れなかったら，お前を食べてしまうところだった」と言った。正体を暴かれると変身はとけるというのである。キティ氏は実はカリンボ氏の「力を測っていた」のだとカリンボ氏は述べた。私の調査地から20キロほど離れたM地域で聞いた話だが，以前その地域で家畜がなにか野生の動物に襲われる事件が相次ぎ，人々を困らせていた。ある晩，夜中に怪しい物音で目が覚め弓と矢を持って小屋の外に忍び出ると，ヤギが獣に襲われ食われているところだった。弓で射ると命中したようで獣は逃走した。翌日，近所に住むニャマウィ（仮名）氏が死体で見つかった。彼の口の周りは，生肉を貪り食ったあとのように血まみれであったという。おそらく獣に変身して家畜を襲っていたのは彼だったのだ。

ある女性は「ムハッソにはいろんなことができるんだ（muhaso una mambo manji)」と言って，自分の夫の父親（分類上）カゾンゴ氏（仮名）に驚かされた経験を語った。彼女がキナンゴ ── ドゥ

ルマの中心の町で当時の私の小屋のあった辺りから歩いて１時間くらいの場所に位置していた ── に行こうと，ちょうど私の小屋から見える街道脇のムナゴの木のあたりを歩いていたとき，反対側からやってきたカゾンゴ氏に会い，挨拶を交わしてすれ違った。彼女はキナンゴに，カゾンゴは逆方向に歩き去った。一本道である。しかし彼女がキナンゴに着くと，驚いたことにカゾンゴ氏が向こうからやってくるではないか。瞬間移動としか考えられない。「私は言ったよ。私は術をかけられて惑わされている（nidzitirirwa kare mino)。そしてすごく不安になった。」

話し手にとって ── ときに聞き手にとっても ── 身近な人物についてのこうした話をどう受け取ったらよいのか，私は途方にくれてしまうが，無数のこの手の話が＜実際にあった，あるいはあったとしても不思議ではない話＞として流通していた。そこではムハッソが可能にする常識を超えた不思議のもつ魅惑が，ときに，妖術使いに対して人々が常々示すおぞましさの感情を凌駕しているかのように見えることすらある[5]。こうした不思議を引き起こす技術をもし使いこなせるとすれば，それは確かに魅力的ではないだろうか。

２－４．ムハッソの代償

しかし，その魅力は多くのドゥルマの人々に，そうしたムハッソの獲得を求めさせたりはしないようである。こうしたムハッソの多くについては，施術においても用いられているありふれたムハッソは別として，誰もそれらがどこでどのようにして手に入れることができるのか知らない。実際にそうした特別なムハッソをもっている妖術使いの伝でもあれば手に入るかもしれないが，それは今の日本の社会で誰かが「殺し屋」とコンタクトしてみようと試みるのと同じくらい，非現実的で実現可能性の低い話である。さらにムハッソはそれを所持すること自体に危険が伴うと考えられているふしがある。上のカタンボ氏の所持していた，人を透明人間にするムハッソの相続を今の屋敷の長たちが恐れ拒んだように，父親の所持しているムハッソ ── たとえ父親が妖術使いの噂がない単なる施術師であった場合ですら ── の相続を子どもたちが拒むことはよくある話である。また，すべての場合にそうだと明示的に語られるわけではないが，こうした不思議を可能にするムハッソの使用には大きな代価がともなうという考え方がしばしば見られる。たとえば人を怪力にし，ナイフや銃弾すら受け付けない無敵の身体にするといわれるブンドゥゴ（bundugo）と呼ばれる施術／ムハッソは ── これ自体はおぞましい妖術とは必ずしも考えられていないが ── それを施された者を貧乏にしてしまうと言われている。彼が手に入れる財は，現金であれ，家畜であれ，衣服であれ，ラジオであれ，すぐに壊れたりぼろぼろになったり死んでしまったりして，まったく手元に残らないというのである。後述するように，もっぱら他者に危害を加える側面が強調されるムハッソや，それを手に入れた人を裕福にする効果のあるムハッソは ── こちらは嫌悪すべき妖術の一種であるとみなされている ── さらに深刻な代価を要求する。本人自身が自らの身体になんらかの欠損をこうむったり，それよりも恐ろしいことに，彼が一番大事に思う親族の犠牲を引き換えに要求したりするのである。

バンダ老人（仮名）は，若い頃友人と４人（いずれも近在の実在する人物である）で「富を探し

に」タンザニアに赴いたときの経験を語ってくれたことがある。タンザニアに着くとそれぞれ別々の施術師を求めた。バンダ氏が尋ねた施術師は彼の頼みに同意し，お前を裕福にするのはたやすいことだと言って，彼に施術を施した。その後，明け方になって彼はある木の根元に連れて行かれ，その根のあるあたりを掘るように言われた。しばらく掘ると，太い瘤のようになった根の一部が現れた。さあ，その瘤のところをよく見てごらん。よくよく見ると，それは彼の母親の顔をしていた。施術師が言うには，さあ，その木の根を瘤のところで切断しなさい。そしてそれを死体をくるむ布に包んでもって帰りなさい。そうすればお前はすぐに裕福になるだろう。「ああ，私にはどうしてもできなかった。私は断った。施術師はお前は私のムハッソを無駄にしたと言った。」もしその根を切っていたらどうなっていただろう。「旅を終えて，家に帰ったら，お前の母がしかじかの日に亡くなったときかされる。そういうこともありえる。でも私は断った。おかげで，ほら，ごらんのように私にはなんの財産もない。」同行した他の友人たちとは，その後，自分たちが何をしたかについて何も語り合わなかったという。しかし少なくともバンダ氏自身は，ムハッソをつかって母親の死と引き換えに裕福になれるという誘惑に打ち勝った，というのである(6)。

ムハッソは常識を超えた不思議をなしうる魅惑のテクノロジーとして，人々を強く引きつける側面を持っている。しかしまっとうな人間であれば，そのテクノロジーを手に入れるために他人を犠牲にするという誘惑には抗するべきである。妖術使いとは私利私欲のために，この誘惑に屈服してしまった人間なのである。

2－5．ムハッソの作り方・使い方 ── ムバレを例に

具体的にはムハッソはどのようなもので，どんなふうに使われるのか，実例をひとつ紹介しておこう。もちろん，自分を妖術使いと認めて，その知識を明かす者など存在しないので(7)，ここで例として挙げるムハッソは，妖術使いに対処することを使命とする施術師が用いるムハッソである。私が親しくしているこの施術師は，ときおり近隣の人々のあいだで妖術使いの疑いが口にされることがないわけでもないとはいえ，本人は人々の病気を治すことこそ自分の使命だと熱心に語っていた。妖術使いに対抗する彼の所持する多くのムハッソについて自信を持っており，またいつも真剣に治療に従事していた。また新しいムハッソを手に入れることにも熱心で，自分の持っている知識について秘密主義的なところの多い施術師たちのなかにあって，その知識についてあけすけに語ることでかなり例外的な人物であるかもしれない。2002年に彼はギリアマ地域のある施術師から，ギリアマの伝統的なムハッソ，かつてはカヤの長老たちのみによって管理されていたというムバレ（mbare）と呼ばれる抗妖術のムハッソを手に入れたばかりであった。そしてその作り方について熱心に教えてくれた。

ムバレの主成分は７種類の植物（ムヒ muhi）であるが，いずれも単にブッシュへ行って採集してくればよいというものではない。たとえば主成分の一つであるムサヴラ（musavula）という木について言えば，その採集には込み入った手続きが必要である(8)。昼間に，赤い（褐色の）雄鶏をつれて，その木の生えているところに行き，その根元を掘る。根が30センチほどの長さまで露出す

ると，次のように唱える。

「さて，お前に血を与えよう。ムバレよ。今，こうして私はお前を求めにやってきた。汝ムバレよ。汝，ブッシュにいる者よ。今，こうして私はお前を連れにやってきた。これからは屋敷にあれ，汝ムバレよ。汝はキラボ（chirapho）だ。今，こうして私がお前を連れにやってきた。私はお前を盗んでいない。誰某氏から購入したのである。その誰某氏は…（中略。以下購入履歴が述べられていく。）…さて，今私がやってきた。これがお前の血だ。」(9) そして用意していた赤い雄鶏を屠り，その血を露出した根の部分にふりかけ，根を切断する。「そうすると根の切断面から，赤い血のような樹液が滲み出てくるのが見えるだろう。」こうして切り取った木の根は，そのまま屋敷に持ち帰ってよい。この唱えごとに見えるように，ムヒの採集とは，ブッシュの野生の力を屋敷の人間的秩序の中にうまく移行させるための技術になっている。

もう一つの重要な成分であるムエンダ・クジム（mwenda kuzimu 直訳すると「死者の国へ行く者」）という名の木の採集には，より込み入った別の手続きが必要である。ムサヴラと異なり，この木の根を掘るのは夕暮れ時である。黒い布と，性別不明のヒヨコを持ってその木の生えているところへ行き，木の根を掘り，唱えごとをしたのち，必要な長さを切り出す。しかしそのまま持ち帰ってはならない。ヒヨコを屠り，掘り出された根とヒヨコの死骸を用意した黒い布で包んで，木の根元に置き，いったん手ぶらで屋敷に戻る。そして夜明け前の雄鶏が最初に刻を告げるころ，再びそれを取りに行くのである。それを誰にも見られてはならない。こっそり屋敷を出ると，途中で衣服を脱ぎ捨て全裸になる。木の根元に置いておいた黒い布に包まれた木の根を，赤ん坊を負ぶうように背中に背負い，裸のまま屋敷に戻ってくる。ここでは施術師はまるで妖術使いのように，夜明け前の闇のなか全裸でことを成し遂げる。後に見るように，「異常な性向の持ち主」としての妖術使いのイメージにおいては，妖術使いは夜，裸で行動する者として思い描かれているのである。またここでの一連の行為は，屋敷からブッシュへという死者の埋葬のプロセスを，逆回しに演じているかのようにも見える。

他の木についても，同様にそれぞれの採集方法が定まっている。こうして集めた木は細かく砕き，他の成分をそれに加える。他の成分として必要なものは，ジャコウネコの糞，犬の糞，ネコの糞，ロバの糞，豚の糞。ジャコウネコの糞はブッシュで見つけることができるが，ロバの糞はこの地域では誰もロバを飼っていないので手に入れるのが難しい。モンバサにでかけて購入する。あとは，屋敷の四つの方位から採ってきた一つまみずつの土。これらを混ぜ合わせて，土器片の上に置き，火にかけてじっくり焦がすのである。それを磨り潰して細かい黒い粉にすればムバレの完成である。さらに使用に当たって，剃刀の刃と針を用意しておく必要がある。

このようにして作ったムバレは妖術の攻撃を受けている人を治療し，さらなる妖術使いの攻撃から犠牲者を守るのに用いられる。その際には赤い雄鶏を屠りつつ，ムハッソに対して唱えごとをする。その一部を示そう。

「ムバレ，汝ムサヴラのムバレ，汝キテマのムバレ，汝ムエンダ・クジムのムバレ…（中略，すべての成分に呼びかけた後に，それぞれが盗まれたものではなく，ちゃんと代金を支払うことによっ

てしかじかの施術師から購入したこと等，その購入履歴がつぶさに語られる。）…汝ムバレよ。もしこの患者，この者がまさしく妖術をかけられているというのなら，私は汝クリマムトゥ，妖術使いたちに耕される者に告げる。汝の餌食は妖術使いだと。何者かがここに来たり，この者に妖術をかけようとするならば，汝，彼とあいまみえよ。私は頭痛を命じる，悪寒を命じる，出血を命じる。身体の前（性器）からも後ろ（肛門）からも出血。なぜなら彼は妖術使い。汝は彼の頭を割り，血を噴出させよ。それこそが汝の仕事。彼を食らえ。私は腹についても命じる。剃刀よ，お前の仕事は切り裂くこと。肝臓を切り裂いて落とせ。肺を切り裂いて落とせ。心臓を切り裂いて落とせ。腎臓を切り裂いて落とせ。また私はお前に命じる。その者の前も後ろも封じ，排便も排尿もとめてしまえ。汝，針よ，私は命じる。お前の仕事，それは突き刺すこと。…（後略）…」

強力な施術師だけがコントロールすることができるこの由緒正しいムハッソは，もっぱら妖術使いに対抗する目的で用いられるのであるが，この唱えごとの内容からも明らかなように，それ自体，人を殺す力をもった恐ろしいムハッソであることがわかる。施術師はいわば正義の目的で，このムハッソに命じてその恐ろしい力を発揮させるのであるが，この治療を受けている患者 ── 妖術の犠牲者 ── は，この唱えごとを聞き，施術師によってムハッソに命令が与えられているのを見て，妖術使いがけっして誰にも知られないようにひそかにどんな行為をおこなっているのかを，おそらく理解するのではないだろうか。妖術使いも，きっとこんなふうにして彼らのムハッソに攻撃を命じているのだろうと。妖術使いがどうやって妖術をかけているのか，誰もそれを見たことのある者はいない。しかし妖術による病気を治療し，妖術に対抗する施術師たちが演じてみせる観察可能な行動こそが，妖術使いが行っているはずの観察不可能な行動の現実的なイメージを提供してしまっているのである。

３．ムハッソを用いた妖術

３－１．はじめに

ほとんどすべての妖術は，ムハッソの使用によるものである。妖術の別の特徴の方にもっぱら強調点が置かれているときですら，しばしばムハッソの使用は当然のこととして含意されている。ムハッソを用いた妖術の種類は多く，いちいち数えることもできないくらいである。しかし，対処せねば死にいたるような病気や災いを引き起こす妖術 ── ということはなんらかの対処法があることも意味していることになるが ── のあるものについては，どんなムハッソがあってそれによってどんなことが引き起こされるのかに関して人々は比較的具体的な知識をもっている。ここではそのなかでももっともポピュラーなもの，妖術についての人々の語りに頻出し，また治療の機会も多いいくつかのものに限って紹介することにしたい。

３－２．キブリの妖術

キブリ（chivuri）とは，水面や鏡に映った人の姿であり，影（chivurivuri）とも語彙的に関連し

ている。しかし同時に人格の重要な構成要素であるともされており，この点では日本語の「魂」に近い。キブリは夜，身体を離れることがあるが，夢とはこの分離したキブリがもつ経験なのだと言われたりする。死後，祖霊になるのがこの身体から切り離されたキブリなのだという説に，多くの人々が同意する（浜本 1992a)。キブリはしばしば憑依霊に拉致されたり，妖術によって奪われてしまったりすることがある。キブリを奪われた人は，身体に不調を覚えるようになる。施術師はしばしば患者の瞳を覗き込んで，そのキブリが奪われたかどうか確認するという[10]。憑依霊の場合は，そのキブリを気に入って自分の棲家に連れ去っただけなので，人は朝晩の悪寒，頭痛などの比較的軽度の，しかし長引く身体の不調に苦しむことになる。その人のキブリがどこに連れ去られたのかを探し出し，それを取り返して病人に戻してやらねばならないが，それは憑依霊の施術師の仕事である。しかし妖術によって奪われた場合は，症状は重く，死の危険があり，緊急に対処する必要がある。これがキブリの妖術（utsai wa chivuri あるいは単に chivuri, vivuri（pl.）とも呼ばれる）である。

実はキブリの妖術は，その強烈な特長（後述）によって人々が妖術について考える際の典型の地位を今なお保ってはいるが，今日キブリの妖術によるものと診断され治療がなされる実際例はあまり多くない。ドゥルマで調査を始めてすでに30年近くが過ぎているが，キブリの妖術の治療は，調査のごく初期のまだ私自身何もわかっていなかった頃に一度偶然目撃する機会があっただけである[11]。かつてはキブリのムハッソをもっているとされる恐ろしい妖術使いだと噂される人物が各地にいたし，またそれを治療できる高名な施術師たちも多くいたが，今では少ないと人々は言う。残念ながら，私の知り合いの施術師のなかにはいない。

Mw 老人：昔の老人たちの罪といえば，人のキブリを奪ってばかりいたってことだろうね。あのベキバンバ（仮名）さんといったら！

Ka：いや，ほんとその通り。まさに男そのものだったね（akala ni alume enye. ここでいう「男」は妖術使いの意味)

Ha：え？ 誰の話？

Ka：ああ，昔の妖術使いの名前を挙げているのさ。私の祖父（分類上）のカタナ，あのムァクパタの息子カタナも（妖術で）殺された。大昔の妖術だ。

Mw：人のキブリを奪って，別のところに連れて行く。妖術使いの中には，お前を苦しめることが目的で，すぐにはお前を殺さない奴もいた。そこで施術師を連れてきてキブリを取り戻してもらおうということになる。(妖術使いの方では）それを聞いて，もう大急ぎ。家に帰ってキブリを切り殺す。さて施術師がやってくると，患者はもう死んでいる。切り殺されている。患者は死んだ，さて何ができよう。巨大な瓢箪を持っているあいつらの仕業さ。あいつらの仕業。

Ka: 当時の奴らは実に獰猛だった。

Mw: このあたりではベキバンバだね。それと最近亡くなったムァザメ（仮名)。それから，ム

ハッソのムベガ（仮名），こいつはムァザメより上手だった。それからベムァンガラ（仮名）あのバンダさんの父親だよ。それからベツジ（仮名）とベコンダ父さん（仮名）。それにムハッソのカタナ（仮名）！ムドエ（仮名）さんの息子だったカタナだよ。ムハッソのムベガの弟（分類上）だよ。それからあのンジリ（仮名）の連中。ベキジツォ（仮名）と，あいつンジリ。彼らは最強のムハッソをもっていたものさ。でも最近はキブリの妖術はあまり耳にしなくなった。少なくなった。当時の妖術使いたちはもう皆死んでしまったからな。

近隣だけで，これだけ妖術使いがいては，大変である。

キブリの妖術にも何種類かがある。チャリカ，シュング，ピンダ・モンゴ，ムコモ，バンデ（charika, shungu, pinda mongo, mukomo, bande）などはいずれもキブリの妖術の一種で，症状の特徴や使用するムハッソの種類による区別のようだが，一般の人々はその違いについてはよくわかっていない。いずれも嘔吐，激しい頭痛や関節痛などを特徴とするようである。たとえばシュングについては，頭が「石で殴られたように」痛い，鼻から血を流す，目が飛び出る（膨れ上がる）といった症状があるという。キブリの妖術にかかった人は，夜毎（夢の中で）海に連れて行かれ水のなかに沈められたり，死体を見たりするという。死体を墓まで運ぶ輿（jeneza）が夢に出てくると[12]，いよいよおしまいだという。「(夢の中に）何人もの白い布を身にまとった人々が輿を運んでやってくる。そしてお前の小屋の入り口の前に止まってお前に言う。『さあ，ミツル（実名）よ，この中に入りなさい』。お前は輿に押し込まれる。ぎゅー。それで終わりだ。お前はもう死んでいる。」犠牲者が死ぬ直前に見た夢をどうして知ることができるのかというツッコミはしないでほしい。

キブリの妖術のムハッソは，人の頭部を模った栓で蓋をされた，ひときわ大型の瓢箪の中に入っている。妖術使いはその瓢箪を使って次のような仕方で犠牲者のキブリを罠にかける（ku-hega)。たとえばブッシュの中を一人で歩いているとき，どこからか自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。そこで声のした方向に向かって応答してしまう。「ヨォー！」誰もいない。気のせいだったのか。しかし実は呼びかけに応えた瞬間，すでに彼のキブリは妖術使いの瓢箪の中に呼び込まれ捕らえられてしまったのである。夕方を待つまでもなく彼は激しい頭痛に苦しみ始める。妖術使いは捕らえたキブリをしばらくは瓢箪の中に閉じ込めたまま，いたぶるかもしれない。そして時が来れば，それに止めを刺す。犠牲者には死が訪れる。手遅れにならないうちに早急に対処せねばならない。

キブリの妖術の忌まわしい点は，この瓢箪がその持ち主の近親者，とりわけ実の母，姉妹などの女性親族を殺害することなしには完成しないとされている点である。妖術使いは彼女らを殺害し，そのキブリをこの瓢箪に閉じ込める。そのキブリを用いて，妖術使いは彼の術の犠牲者のキブリを瓢箪に呼び込むのである。キブリはキブリによってしか呼び込むことができない。もちろん殺害するといっても，それも妖術によってである。彼女らは突然の病気などによって不慮の死をとげる。誰もそれが彼のせいであるとは知らない。そして彼は，殺した女性のキブリを使って，彼の瓢箪を完成させるのである。あるいはすでにキブリの瓢箪を持っている妖術使いに殺人を依頼してもよい。

その妖術使いは，自分の瓢箪を使って依頼者の女性親族のキブリを呼び寄せ，殺害する。そうしてそのキブリを使って依頼者のために瓢箪を作ってやる。

犠牲者の病気がキブリの妖術によるものと占いによって診断された場合，キブリ戻しの施術が早急に必要になる。それを行うのはキブリの施術師（muganga wa chivuri）と呼ばれる施術師である。興味深いことに ── ある意味で実に理屈に適っているのだが ── キブリを取り戻すためには，妖術使いと同様なキブリ捕獲のテクニックを用いるしかないとされている。施術師も「キブリの瓢箪」を用いて，奪われたキブリを取り返すのである。単に同じムハッソを用いるというだけではない。そのためには施術師は彼自身の近親者を殺害する必要があると考えられている[13]。以下の施術の場面の記述からも明らかなように，施術師自身そのことをあからさまに，芝居がかったやりかたで，認めている。

施術はこんなふうに進む。夜中に，犠牲者の屋敷の関係者だけで行われる。患者は小屋の中で，床の地面の上に足を戸口に向けて，布を全身に被せられて仰向けに寝かされている。戸口の外，小屋の前庭の中ほどに人の頭部を模った栓をしたキブリの瓢箪（ndonga ya chivuri）が置かれ，そこから患者まで，トウモロコシの薄皮粉（wiswa）── トウモロコシを粉にする前に搗き臼で搗くが，その際に分離した薄皮の部分で鶏のえさなどにされる部分 ── で線が描かれる。犠牲者のキブリをこの薄皮粉で捕まえる（ku-hega）のだと説明される。施術師によっては他に，トウモロコシの粉や，水で描いた線を用いる者もいるらしい。また弓矢やナイフなどをキブリの捕獲に用いる施術師もいるそうだ。また話に聞いたところでは，瓢箪から患者の右足の小指までを細い紐で結ぶ施術師もいるそうだ。キブリが戻ると，この紐を伝ってキブリが患者に入っていくのが見えたという。振動が伝わっていくのが見えるらしい。なかなかに凝った演出である。私が見た唯一の事例では，トウモロコシの薄皮粉の線が描かれただけだった。施術師は小屋の中で患者に薬液（vuo）を振りまくと，小屋の外に出る。屋敷の人々は手拍子を打ち，一人の若者が石油缶をリズミカルに打ち鳴らし，施術師はそれに合わせて歌い踊り，ときおり瓢箪の中を覗き込むしぐさをする。録音機材を持ち合わせておらず，歌や人々とのやりとり，唱えごとの内容を正確に示すことはできないが，施術師は「私は母を食べた。どうぞ私をお笑いください。神のキブリよ。ch’arya mayo, nitsekani, chivurigbwa cha mulungu.」と歌っていた。と，突然施術師の目から涙があふれ出る。瓢箪の中に彼が殺した親族の姿が見えたから，その生前を思い出して悲しくなって泣くのだという。それは病人のキブリを取り戻した瞬間でもある。施術師の死んだ親族のキブリが，奪われた病人のキブリを連れ戻しに行って，それと一緒に帰ってきたということなのである。小屋の中では患者が仰向けに横たわったまま，身体を小刻みに震わせ始める。キブリは必ず右足の小指から帰ってくるので，患者をよく観察していれば，右足の小指がまず震え始め，そして脚，全身と震えが伝わっていくのがわかるという。施術師は屋敷の主に，用意してあったヤギを屠り，その血を椀にとってもってくるよう急き立てる。椀の中の血は患者の身体に塗りつけられた（より普通には患者に飲ませるのだという）。最後にキブリの瓢箪のムハッソとその他のムヒで作られた護符（pingu）が患者に与えられ，足首に巻きつけられた。患者のキブリが再び奪われることの予防だという[14]。

ムハッソの入った瓢箪を用いて，犠牲者のキブリをその中に捕獲して殺す。その瓢箪は，妖術使い自身の近親者を殺して作ったものである。こうした強烈で忌まわしいイメージが，人々にキブリの妖術をドゥルマの妖術の典型として考えさせているのだろう。さらにこの例は，ムハッソを使用する者の根源的同質性についてもあざやかに語っている。施術師がもっている治療用の瓢箪は，妖術使いが用いるものと同じものであるし，施術師はそれを親族を殺害せねば手に入れられない。施術師自身が一種の妖術使いなのである。キブリの妖術使いが，実際に瓢箪を使ってキブリを捕獲しているところを目撃されることはけっしてない。しかし目撃不可能な妖術使いの行動を，施術師たちがまさに目に見える形で ── ただし人々に危害を加えるのではなく，人々を助ける目的で ── 演じて見せている。ここでも施術師のほうが，妖術の現実的なイメージを提供しているのである。

この「古典的」なキブリの妖術は今日ではほぼ廃れてしまったが，犠牲者のキブリを奪って殺害するという方法は，ドゥルマの人々にとってさらにいっそう未知の領域に属する妖術によって取って代わられている。魔物（ジネ jine，イスラムでいうジン jinn である）を使ったイスラム系の妖術である。魔物やコーランの章句を使って，彼らは犠牲者のキブリを呼び出す。呼び出されたキブリが水を張った磁器の器の水面に映った瞬間に，その影をナイフで切り裂くと，犠牲者に死が訪れる。犠牲者は直前に誰かに呼びかけられたような気がして，返事をしてしまっているはずだ。このあたりは古典的キブリの妖術と同趣である。イスラム系の妖術は海岸部のイスラムの導師や施術師が行っているとされるが，彼らに殺人を依頼するドゥルマ人がいると想像されている。この地域にいる数少ない熱心なイスラム教徒も，もしかしたらこのタイプの妖術を知っているかもしれないなどと噂されている。イスラム系の妖術の脅威は近年ますます大きくなっているが，人々の妖術世界の開放性・可変性の一つの兆候であると言えよう。

３－３．フサの妖術

キブリの妖術とそれに対抗する施術は，施術師と妖術使いの紛れもない同質性を明るみに出している。他の妖術においては，この同質性はそれほど劇的に演出されてはいない。一方，ムハッソの性格そのもののなかに，邪悪さと有用性，不当性と正当性の点で曖昧性が含まれているような例はけっこう多い。その一つを紹介しよう。

ツァムラ（tsamula）と呼ばれる妖術があるが，「散らばらせる，離散させる」などの意味を持つ動詞ク・ツァムラ（ku-tsamula）に由来するこの名前は，もっぱら邪悪な攻撃を連想させる。それは平和な屋敷の人々を仲違いさせ，屋敷の人々を離散させてしまう妖術である。屋敷の解体と親族の仲違いと離散という事態は，ドゥルマの人々にとっては，ある意味で個々人の生死以上に深刻で恐ろしいことかもしれない。占いで，屋敷の問題がツァムラのせいであるというとされることもかなり頻繁に見られる。ツァムラは妖術使いの隣人の理不尽な，しかも取るに足らない妬みに端を発しているかもしれない。

「こんな具合だ。私がお前のことを憎んでいるとしよう。こんなふうにお前が食べている様子を見るだけで，してやられた気がする（viniverere kare）。あるいはお前が収入を得るのを見るたび

に。別にお前と喧嘩している（実際に激しく言い争ったりしている）というわけではない。昨日も喧嘩したわけじゃない，一昨日も喧嘩したわけじゃない。でもお前が日々ちゃんと食事をしている様子を見て，そんなふうに食事していることを妬ましく思う（natamani viratu vyako uryavyo）。ミツル（実名）の野郎，おまえは俺を惨めな気分にさせる（unanyeta uwe）。よし待ってろよ。ムハッソを手に入れてやろう。そしてこのあたりに仕掛けてやろう。私は夜やってくる。ムハッソの包みをそこにくくりつけ，開いておく。風が吹けば，ムハッソが飛散する（undafuka fuka）。（風上に仕掛けるのですか？）そう，風がこう吹いて，熱気がこちらに来るように。」こんな具合に妖術使いは，なんの罪もない相手に対して，単なる理不尽な嫉妬からツァムラを仕掛ける。その効果はてき面である。「お前自身が（妻と）仲違いを始めてしまう。（お前はこう考える）妻がここにいるなら，俺は出て行こう。ナイロビに行ってしまおう。こんなところではもう暮らせない。さてこんな具合に屋敷の誰も彼もが不機嫌で怒りっぽくなる。屋敷の仲間に敬意を払わない。長老もなければ，子供もない。誰もが自分こそが男だと思っている。こうして皆，散り散りばらばらになる（atsamukana tsamukana kamare）。これがツァムラだ。」

この説明だとこの妖術をかけるのはずいぶん簡単そうだが，別の人の説明によればもう少し込み入った手続きと準備が必要である。ツァムラをかけようとする妖術使いは，夜，逆毛の鶏（kuku wa chidimu）をもって犠牲者の屋敷に忍び寄り，屋敷近くの地中にそれを生き埋めにする。そして翌朝，屋敷の人に気づかれぬようそれを掘り出す。もうこれだけで十分実行困難な話なのだが，さらに掘り出した鶏が死んでいてはならないという条件がつく。掘り出した鶏がまだ生きていることがわかれば，次の段階に進む。トウモロコシの練粥の食事を摂った際の最後の一塊と，履きつぶされた草履の片一方を用意する。掘りだされた鶏を屠り，その足を切り取る。ムハッソに唱えごとをし空中に散布するとともに，用意してある練粥の最後の一塊，磨り減った草履の片一方，それに切り取った鶏の足を，屋敷の人々が散り散りばらばらに去っていくべきそれぞれの方向に投げ捨てる。ツァムラはただちにその効果をあらわし，早くもその日のうちに屋敷の人々が言い争いを始めるのを見ることができる。人々が離散し，屋敷が消滅してしまうまでにそう長くはかからないだろうという。

取るに足らない些細な妬みから隣人の幸福を破壊してしまう忌まわしい妖術使い，というイメージがこれほど前面にでている妖術もないといってよい。しかもそうしたからといって，別に妖術使い自身には何の得もないのに，と人々は吐き棄てるように言う。それどころか，このツァムラに使用されるムハッソは，その所有者を貧乏にすると考えられている。「今日2,000シリング手に入れても，もう明日にはなくなっているという具合」。もしその結果，裕福な隣人をいっそう妬むことになるとすれば，もうまるで妬みの負のスパイラルだ。

ところでツァムラに用いられるムハッソにはもう一つの使い方があり，そちらの方はフサの妖術（fusa）として知られている。煙などが飛散する，霧散するという意味の動詞ク・フカ（ku-fuka）に由来する名称である。係争中の問題などを解決に至らないままうやむやにしてしまったり，追及する気を失わせたり，忘却させたりして問題を立ち消えにする術であるという。たとえば，人を雇っ

て仕事（小屋の建築とか）をさせながら，いざ約束の金を支払う段になって，金を踏み倒すためにフサを使う。支払いを催促しても，なにかと口実を作って支払わない。ついに業を煮やした男が，（キナンゴの町の）チーフの法廷に訴えようと決心する。しかし翌日いざ出かけようとするときに，別の厄介な問題に見舞われて，結局町に行くことができない。こんな具合でらちがあかず，ついには本人自身がすっかり忘れてしまう。これがフサの効果なのだという。明らかにフサをかけられた方にとっては，とんでもない邪悪な術である。

しかし，フサに関してはそれを専門とする施術師がおり，そのムハッソを所持していることを隠すどころかむしろ誇示し，近隣の人々の役に大いに立っているという事実がある。フサは，地域の人々にとって大きな有用性ももっている。裁判などで不利な立場に立たされた者にとっては，裁判での彼に対する追及がうやむやになるのは願ってもないことだ。そしてこの地方の多くの人々にとっては，町の雇用者や行政や警察相手の裁判では，不利な立場に立つことのほうが圧倒的に多いのである。というわけでこの術の需要はけっこう大きい。近隣の一人の女性メンザゼ（仮名）には，モンバサの商店で店番をしていた孫息子（彼女の死んだ娘の息子）がいたが，彼が店の金をくすねて逃走したとの容疑で逮捕された際に，ためらうことなく近所に住むフサの施術師を雇った。裁判が開かれる前夜に彼女の屋敷にやってきた施術師は，夜を徹してムハッソの入った小さな瓢箪を自分の左手の掌に打ちつけながら唱えごとを唱え続けた。裁判当日の夕方まで彼は休みなく唱え続けたという。結局，孫息子には一年の禁固刑が言い渡されたので，この徹夜の努力は無駄に終わったのであるが[15]。

ツァムラとして用いられるとき，このムハッソの使用は正当化の余地のない邪悪な妖術である。フサとして用いられるとき，それをやられた方にとってはやはりけしからぬ妖術なのだが，彼とて立場が変わればたちまちそのお世話になることになる。万人に開かれた困難打開の可能な手段の一つであり，隣人に対して使うことにはいささか問題があるとしても，それが町の雇い主や警察，政府の役人に対してということになれば，完全に正当化可能な行為となる。ある種のムハッソは，このように使用のコンテクストに応じてその色合いを変える。

3－4．フュラモヨ

上で紹介したフサにもややその傾向がないわけではないが[16]，妖術の中には，病気や不慮の事故や災難などの形で相手に危害を加えるだけではなく，犠牲者の思考や精神に変調をもたらし，そこから犠牲者の生活の破綻，最終的には死を引き起こすといったタイプの妖術がある。

ドゥワ（duwa）と呼ばれる妖術は，キブリの妖術と同様に，どちらかといえばかつて猛威を振るったが，最近は以前ほど盛んには見られなくなった部類の妖術である。一言でいえば貧窮の末の死をもたらす妖術である。「お前が困窮するようにと祈願する（ku-apiza）する妖術だ。お金を手に入れても，まったく残らない。ヤギを手に入れても残らない。お前自身が売り払ってしまう。そして元の木阿弥。これがドゥワだ。」ドゥワにはウリャニ（uryani），フカラ（fukara），ドゥワ・ラ・キジツォ（duwa ra chidzitso 意味は「嫉妬のドゥワ」），ドゥワ・ラ・モホ（duwa ra moho 意味は

「火のドゥワ」）などいくつかの種類がある。ウリャニとフカラについてはたいていの人が知っているが，あとの二つについてはやや施術師たちの専門知識に近いもののようだ。ウリャニでは言わば精神的な破綻という効果が強調される。それに囚われると，心が平静を失い（roho kutanga tanga），まだ生きているのにまるでもう自分が死んでいるような気がする（akale mo dza atsikale mo），人々に嫌われているような気がする，また自分が自分ではないような気がする（dza ni mutu dza tsi mutu「人であるようで人でない」の意味）といった状態におちいるのだと言う。それに対してフカラでは，経済的な破綻という効果に強調が置かれる。生活が乱れ，金が手に入ると屋敷には寄りつかなくなり，すべて酒に消えてしまう，何か職についても，長続きせずすぐに止めてしまう，などはいずれもフカラの術のせいでありうる。もちろん同じドゥワなので，区別はそれほど明確ではなく，思考や精神の変調はいずれにも共通しているようにも見える。「フカラ！お金が手に入ると，分別（akili）を失う。落ち着かない。何か役に立つことに使いたい。でも使い道は多い。お金を使い果たしてしまって，やっと分別が帰ってくる。（それまでは）人の忠告にも耳を貸さない。奥さんが，どうして無駄使いするのなどと言おうものなら大喧嘩。仲裁もできない。お金が底をついて，喧嘩も終了。分別がやってくる。」[17] 妖術にかかってなくても，普通に見られそうな状況ではあるが。

年配者たちの中には，ドゥワが個人に対してではなく親族集団に対してかけられる妖術であると強調する人々も多い。父系リニージ（ウクルメ ukulume）ではなく母系リニージ（ウクーチェ ukuche）がターゲットであると言う人もいれば，屋敷全体が治療の対象になると言う人もいる。その治療は，ブッシュの中の開けたところに柵をめぐらして「牛囲い（chaa）」をつくりそこに人々全員を座らせて行う。囲いの中にはムコネ・ウチェ（mukone uche）だけで焚き火が六ヶ所に作られ[18]，それに火熾し棒で火をつける。鶏（逆毛，白，黒）による施術の後，人々の周りをヒツジが引き回され，その胃の中身が取り出され，それで人々の全身が洗われるのだという。この最後の手続きは，屋敷の修復のための「冷やしの施術」を思い起こさせる（浜本 2001: 233–234）。年配者以外は，この施術が実際に行われたケースをほとんど知らないようである[19]。

今日では下火になったといわれるドゥワに対して，実際の占いでの診断や，施術においてドゥワにとってかわっているのがフュラモヨ（fyulamoyo）と呼ばれる一群の妖術である。その名称自身はドゥルマ語の「心（moyo）」を「曲げる，そらす（ku-fyula）」に由来している。こちらもドゥワと同様な思考や精神の変調を引き起こす効果を特徴としているが，フュラモヨはもっぱら個人をターゲットにした妖術である。

「フュラモヨに捕らえられるとどうなるかって？ 心（心臓）が速くなる（roho yindakpwenda mairo.）。心が破裂する（roho kpwenda kpwahuka.）。そして不安（na wasiwasi）。分別がかき乱される（akili kuvurungika）。そして仲間のことを嫌いになる（kukala kpwenzi anzio）。どこに行っても泣きたいばかり。そしてロープで首を吊ることばかり考える（kuziazira kudzifunga lugbwe）。自分を殺すこと（ku-dzolaga）ばかり考える。それが終わりだ。」

全身の痒み（kuwawa wawa）を症状にあげる人もいる。「自分の体を掻きむしってばかりいる。

そして発狂（kpwayuka)」。

対人関係，とりわけ夫婦関係のの破綻もその特徴に挙げられる。「フュラモヨに打たれると，おまえ自身が（結婚生活に）うんざりしてしまう（rakukala hata uwe usinywe)。(そして次のように考える。）もう出て行こう。私の夫は貧乏だし（kana chitu.「物をもっていない」)。」「誰と付き合うようになっても，ああ，この人じゃない（ye ndiye mugbwira, aa, tsiye.)。お前の方から別れてしまう。」「どこかに行ってしまいたい。自分がいる場所はここじゃない。」

子供の学業不良もフュラモヨのせいかもしれない。「キンドロ（仮名）は父に学校に行かせてもらった。父の金を壊した（使った)。そして後は（最終学年の全国一斉におこなわれる）試験を受けるのを待つばかり。ところがフュラモヨを入れられた（watiywa fyulamoyo)。突然勉強が嫌いになる。心は不安でいっぱい。分別はばらばらになり，自己嫌悪。うんざり。友人も皆嫌いになってしまった。先生ですら，先生を見るとまるで糞便でも見ているかのよう。先生たちとも仲違い。さあ，どう思うね？ フュラモヨだってことに異論ある？」

職業放棄や一箇所に腰をすえることができないのもフュラモヨによるものかもしれない。「お前は，良い職にありつく。そして理由なしにそれを捨ててしまう。何故だと聞かれてもお前は何も言わない。ああ，ああ，ただうんざりしているだけ（udzisinywa tu)。(妖術使いは）お前が順調にやっているのを嫉妬する。それでお前の心を捻じ曲げてしまうのさ（yunafyusa fyusa moyo tu)。一緒に仕事をしている同僚がこいつだとする（その場に居合わせた青年を指差して)。お前はこいつが嫌いになる。こいつと意見があわない。上司とも仲違いする。これこそフュラモヨだ。」

生活も無計画になる。「お金が手に入っても，何に使ってしまったのかわからない。金が手に入ると，この金はきちんと置いておこうと思うものだろう？ なにか難事に直面するかもしれない。たとえ100シリング，200シリング（の難事）だったとしても，(お金をちゃんと置いてあれば）お前には心配ないとわかっている。でも，もしお金を手に入れて，それが無軌道になくなってしまう(zinasira hovyo hovyo）としたらどうだろう？ それは，お前，ムハッソだよ[20]。」

「症状（magbwiri「捕らえ方」)」はこのようにさまざまであるが，いずれも「心を曲げる」つまり精神を変調させるということでは共通性があるとも言える。当初私は，自己嫌悪や自殺を妖術のせいだとする考え方に違和感を覚えた。しかし多くの人がする次のような説明を聞いているうちに，妙に納得してしまった。

ある老人が言うには，「お前にとって一番大切なものはなんだい？ お前自身じゃないのかい？ だからお前はお前自身を嫌いになることなどできない。(それなのに）自分自身を憎み，殺してしまおうと考える。ムハッソだ。もしムハッソでなければ，たぶん憑依霊[21]。もし何もなかったら，なんと，お前は知性（akili「分別」）がない。人々はそれを問題にすることを止めてしまう(garichwe, kagagombwa kahiri.)」普通ならまともな知性があれば人は自分を嫌いになったりするわけがない。だからもし人が自分を嫌いになったとしたら，そのこと自体普通ではない，なにかあるというのである。

フュラモヨにはさまざまな種類があると言われている。その細かい点は施術師たちの専門的な知

識の領分 ── しかもそれぞれの施術師ごとに分け方や種類の数も違っているようだ ── であるが，次のような二つの種類わけは，かなり広く知られている。

第一の種類わけでは，フュラモヨは「霊のフュラモヨ（fyulamoyo ra pepo)」，「自己嫌悪のフュラモヨ（fyulamoyo ra dzimene)」あるいは単に「自己嫌悪（dzimene)」，「憎悪（chimene)」，「ムバユムバユ（mbayumbayu)」などに，おそらくはその主要症状に基づいて呼び分けられている。「霊のフュラモヨ」に捕らえられると，夫や仲間に暴言を吐くなど他人との折り合いが悪くなり，何もかもが嫌になり，ナイフで自害したり，入水したりして自殺する。「自己嫌悪のフュラモヨ」の場合，言葉どおり人は自分自身を憎み，ブッシュの中で首を吊るなどして自殺する。「憎悪」に捕らえられると，友人のことを嫌いになり，独りで居たがるようになる。「ムバユムバユ」は，人を狂わせる。紙や葉を引きちぎっては独りで笑ったりする。狂人（vitswa）そのものである。いずれも最後には犠牲者は自殺する。

もう一つの分け方は，第一の種類わけよりは一般的ではないが，フュラモヨをさまざまな動物の名前で分けている。「ワニのフュラモヨ（fyulamoyo ra mgbwena)」の場合，犠牲者は入水し，ワニに食われて死ぬ。「イヌとネコのフュラモヨ（fyulamoyo ra paka na diya)」の場合，犠牲者は会えばいつも喧嘩ばかりする。「サイのフュラモヨ（fyulamoyo ra pera)」では，犠牲者はいつも怒ってばかりいる。「ゾウのフュラモヨ」では，犠牲者は同じく怒りっぽく，他人と仲良くできない。「ライオンのフュラモヨ（fyulamoyo ra tsimba)」にかかると，人は棍棒で他人に襲い掛かったり，乱暴を働く。「バッファローのフュラモヨ（fyulamoyo ra nyahi)」もまた人を怒りっぽく攻撃的にする。「ハイエナのフュラモヨ（fyulamoyo ra fisi)」の場合，犠牲者は人を見ると逃げるようになる。「ウシのフュラモヨ（fyulamoyo ra ng'ombe)」の場合，人は無口で不機嫌になる。「コウモリのフュラモヨ（fyulamoyo ra nundu)」にかかると，人を見ると逃げてブッシュに身を潜め，首を吊って木からぶらさがる。「ヤモリのフュラモヨ（fyulamoyo ra mwafu)」に捕らえられると，夜眠れなくなり，夜通し目を覚ましている[22]。

いずれのフュラモヨもンザイコ（nzaiko）という同じムハッソによってかけられる[23]。上の種類分けに見られる症状等の違いは，妖術使いがムハッソに対して，犠牲者をどのように死なせるよう命令（ku-lagiza）したかによる違いだという。前節のフサのムハッソとは違って，人々の役に立ちそうな使い方はなさそうであるし，そうした話は聞いたことがない。フュラモヨのムハッソは踏み道，とりわけ道の分かれ目に仕掛けられる。妖術使いは，犠牲者がどのような死に方をするかに関係する物 ── 首吊りで死んでほしければ縄の切れ端を，といった具合に ── といっしょにムハッソを地面に埋める。誰某を捕らえるようにと命じて。これが「罠（muhambo)」であり，それによって犠牲者を「罠にかける（ku-hega)」のである。その上をターゲットが歩くと，ムハッソは犠牲者を捕らえる（ku-gbwira)。フュラモヨがこのような仕方で用いられることは，歌にまで歌われているので知らない者はいないくらいである。

「フュラモヨっていうのは，ムハッソそのものだよ，あんた。『フュラモヨは，屋敷では拾われない。道端で拾われる』って聞いたことない？」

「歌にもこんなふうに歌われている。『フュラモヨを，お父さん，私は道端で拾ってしまった。(fyulamoyo, baba, naritsola njirani)』」
「ムハッソだよ。ンザイコだよ。」
「屋敷では拾われない，とは？」
「『屋敷では拾われない，道端で拾われる』。つまり道端に罠をかけられる（rihegbwa）ってこと。」
「人がこんなふうに言っているのを聞いたことないかい？『あれ，お前結婚したのかい？』『結婚なんかするもんか。彼女はフュラモヨ。途中で拾っただけの女さ。』ってね（笑い）。」

フュラモヨは今日，この地域では最もポピュラーな妖術の一つであり，私が立ち会ったことのある妖術関係の施術の半数以上がフュラモヨに対する治療の施術であったことがそれをよく物語っている。その施術については，のちに詳しく述べることにしたい。

3－5．テーゴ

誤解があってはならないので急いで付け加えておきたいが，フュラモヨは私の調査期間を通じて最も頻繁にその診断や治療に遭遇することができた妖術の一つではあったが，ムハッソを用いる妖術の中では，この種のいわば精神に変調をもたらす効果をもつ妖術より，身体に直接危害を加える妖術の方がその数においては圧倒的に多いことは言うまでもない。特定の身体部位や症状に特化した，いくつもの妖術が知られている。たとえばマハナ（mahana）は重い皮膚疾患と結びついた妖術の一つで，我われがいうところの「ハンセン病」は── 食事を通じて広がり，また屋敷内で繰り返すという観念がある一方で── マハナによって引き起こされるとされている（浜本 2001: 349）。またニョンゴー（nyongoo）は，妊娠中の女性をターゲットにし，さまざまな疾患や死を引き起こすとされており（浜本 1992b），妊娠中の女性はなにかにつけてニョンゴーを治療できる施術師のお世話になることになる。ここではさまざまな身体症状を引き起こす妖術のうちからテーゴ（tego）について紹介する。

テーゴは性器を中心とする症状をもたらす妖術で，そのもっとも典型的な症状は性器からの膿や出血と痛み，とりわけ排尿痛である。それが淋病であることを知っており，かつそれが性行為を通じてかかることを知っていて，なおかつそれを妖術によるものだと主張することが可能である。妖術使いは，はしばしば性交によって人を捕らえるようにテーゴの罠をかけると知られているからである。

テーゴには特徴的な症状に応じて，多くの種類がある。性器の痛み，膿や出血という最もよく知られた症状は，「トゲのテーゴ（tego ya mwiya）」あるいは「ハリネズミのトゲ（針）のテーゴ（tego ya mwiya wa nungu）」によるものである。そのほかに，灼熱感と痛みの「火のテーゴ（tego ya moho）」，切り裂かれるような痛みの「剃刀のテーゴ（tego ya wembe）」，刺すような痛みの「針のテーゴ（tego ya sindano）」，女性器からの突然の出血を特徴とする「ムコモのテーゴ（tego ya mukomo）」，全身の痺れを特徴とする「ガンジのテーゴ（tego ya ganzi）」，疱疹ができてそれが破れる「爛れのテーゴ（tego ya mahurungbwe）」，皮膚の潰瘍を引き起こす「カンジョンジョのテー

ゴ（tego ya kanjonjo)」，気が狂いそうな痒みを引き起こす「ムァンバニャマのテーゴ（tego ya mwambanyama)」などがある[24]。

「軍隊アリのテーゴ（tego ya tsalafu)」「シロアリのテーゴ（tego ya lutswa)」「オオトカゲのテーゴ（tego ya goromwe)」「ゴキブリのテーゴ（tego ya kombamwiko)」「サソリのテーゴ（tego ya chizimba)」「ヘビのテーゴ（tego ya nyoka)」「カメレオンのテーゴ（tego ya lumbwi)」「イヌのテーゴ（tego ya diya)」など，動物の名で呼ばれるテーゴも多いが，それぞれの動物にちなんだ症状を特徴とする。たとえば「軍隊アリのテーゴ」は全身を蟻にたかられ這いまわれるような感じから，「カメレオンのテーゴ」は皮膚の変色がともなうことから，それぞれそう呼ばれている。必ずしも身体症状とはいえないものもあり，「イヌのテーゴ」は性交途中で性器の分離が不可能になるといった事態を引き起こすとされている。

このように実に多くの種類があるが，ここに挙げたものに尽きるわけではない。異なる施術師ごとに，それぞれがさらに多くの種類を挙げられることができるだろう。しかし使われるムハッソは一つであり，フュラモヨと同様こうした種類の違いは，妖術使いがムハッソに対してどのように命令したかの違いだと言われる。妖術使いは妖術をかける際に，さまざまな補助物をいわば媒体として同時に用いると考えられているのだが，術に際して必要なこうした品々はキリャンゴーナ（chiryangona）と呼ばれる。テーゴの場合，赤い鶏（kuku wa kundu）が常に必要で，さらにどうした症状を引き起こしたいかに応じて，たとえば「トゲのテーゴ」であれば，ハリネズミの針とともに術がかけられる。

テーゴのムハッソには，妖術使いが他人に危害を加えるために用いる以外に，人々にとって正当とみなしうる用い方がある点が特徴である。それはフサのところで紹介した有用性ともまた異なっている。それは妻の浮気を防ぐために，夫によって仕掛けられることがある。妻の小屋の戸口に仕掛けられるのだが，この事実を知らずに ── 妻本人も知らないのが普通なのだが ── その女性と性関係をもつと，テーゴに捕らえられてしまう。とりわけ「イヌのテーゴ」の場合，妻と浮気相手はまさに浮気の現場を押さえられてしまうことになる。こうした場合，夫の嫉妬深さは嘲笑の対象になりうるかもしれないが，彼がテーゴを仕掛けたこと自体は非難の対象とは考えられていない。妻を「盗んだ」者の方に非があるのである。

テーゴ以外にもいくつかのムハッソには，この種の正当とみなしうる使用法がある。

４．キラボ ── ムハッソの正当な使用

４－１．キラボの種類

ムハッソが上のテーゴの正当利用に見られるような用い方をされる場合，それはキラボ（chirapho）と呼ばれる。スワヒリ語の対応する言葉キアポ（kiapo）には通常「宣誓（oath)」の訳語があてられているが，今問題にしているムハッソの用い方としてはあまり適切な訳語ではない。キラボという言葉は，一見したところ関連が薄い３つの行為をカバーしている。一つは，テーゴの

使用もその一例であるが，財産等の盗難を防ぐ目的でムハッソを仕掛ける行為，もう一つは，なんらかの損害に対して犯人がわからない場合，あるいは加害者側からちゃんとした賠償が得られない場合に財産の返却や賠償を求めてかける呪詛の行為，第三が係争 ── とりわけ妖術告発の裁判など ── において両当事者の言い分が食い違っているときに，最終的にどちらの主張が真実であるかを決定するためのムハッソを用いての試罪施術である。「宣誓」という言葉がかろうじて当てはまるのはこの第三の場合に限られる。キラボと呼ばれるこの三種の行為のあいだにどのようなつながりがあるのだろうか。

４－２．盗難防止等のキラボ

妻の浮気防止に用いられる（妻が他の男に「盗まれる」のを防ぐために用いられる）テーゴのように，キラボとしての利用が可能なムハッソは多い。盗難されたくない物に対して，そうしたムハッソを仕掛けておき，「もし何者かがやってきてこの木のマンゴーの実を食べたなら，キラボよ彼を捕らえよ」などと唱えるのである。ムハッソの作り方の一例として先に紹介したムバレもそうで，紹介した際にあげた唱えごとは，ムバレを妖術の攻撃に抗するキラボとして用いる際の唱えごとであった。「何者かがここに来たり，この者に妖術をかけようとするならば，汝，彼とあいまみえよ。…汝は彼の頭を割り，血を噴出させよ。それこそが汝の仕事。彼を食らえ。」唱えごとはムバレにこのように命じていた。ハンセン病に関係のあるマハナもキラボとして利用されうる。

この第一のタイプのキラボとしての使用に特化したムハッソもいくつも知られている。マンゴーやココヤシ ── それほど一般的ではないがパパイヤ，トウモロコシやキャッサバ ── の所有者が盗難を防ぐためにキラボを仕掛けることは，一般的な慣行である。最も有名なキラボは「バハシ（bahasi）」と呼ばれるもので，これが仕掛けられていることは一目でわかる。オーカーの赤い斑点を施されたアフリカマイマイの殻をのせた棒が，地面の上に突き刺さっていれば，それがバハシである。これが仕掛けられた果実や作物を盗んで食べると，盗人はバハシに捕らえられる。その症状は，鼻や口，目などからの出血であり，なかなか止まらない。あるいは怪我をした際にも，傷口から血が止まらない。このキラボを専門とする施術師は，通常の施術師をさすムガンガ（muganga）という名称では呼ばれず，特別にボラ（bora）と呼ばれる[25]。

「ヒヒのキラボ（chirapho cha nyani）」も作物の盗難よけによく使われている。ヒヒは畑のトウモロコシを盗むことで知られている，というのがその名前の由来である。このキラボに捕らえられると，ヒヒのような声で泣き喚き，落ち着き泣くきょろきょろあたりを見回すなどヒヒのように振舞うようになる。「ヒヒのキラボ」という言葉自体，人々が大勢いるところで口に出すことが禁じられている。この言葉を口にしたとき，居合わせた人々の中に万一このキラボに捕らえられている人が混じっていたら，その人はその場で死んでしまうだろうと言われている。ヒヒのキラボには子供がよくひっかかることが知られている。

その他に，「陸ガメのキラボ（chirapho cha kobe）」「ワニのキラボ（chirapho cha mamba）」「海ガメ（ndogoe）」「テング貝（sekeneko）」「ザヤ（dzaya）」などが手軽でよく知られているキラボであ

る。いずれも皮膚疾患が特有の症状である。「トウモロコシ粒のキラボ（chirapho cha pure)」に捕らえられると，トウモロコシ粒を食べたヤギのように腹が膨満する。

こうしたキラボに捕らえられていることがわかると，そのキラボを専門とする施術師によって解除（ku-taphula）の治療を受ける必要がある。キラボは，それが誰であれ，作物を食する人を無条件にとらえるので，キラボを仕掛ける際には作物の所有者は，施術師からキラボの効力を解除するための方法を授かっておく必要がある。それはムハッソであったり，特定の草々で作られるヴァンダ（vanda）と呼ばれる草束であったりする。所有者やその家族などが作物を利用する場合には，前もってキラボを「冷やし（ku-reza)」し，その効力を無効にしておかねばならない。さもないとたとえ所有者であっても，キラボに捕らえられてしまう。実に面倒だ。

４－３．償いを促すキラボ

第二のタイプのキラボは，盗難その他の被害に際し，加害者の正体が通常は不明の場合にかけるキラボで，その目的は加害者の方から名乗り出て，盗んだ品を返す，あるいは被害を賠償するよう促すことにある。加害者と思しき者が賠償に応じようとしないときにも用いられることもある。このタイプのキラボを専門とする施術師がおり，人々は多くの場合，遠方にいる施術師に依頼してこの種のキラボを打つ。

たとえば，ウシを盗まれた者はキラボの施術師を訪問し，ムハッソに対して「誰が私のウシを盗んだのか私は知らない。それが男なのか女なのか私は知らない。しかしキラボよ，行ってそいつを捕らえよ。」などと呪詛の言葉を述べる。この行為をクロザ（ku-roza）するという。キラボは悪事を働いた当人ではなく，彼が属する母系集団（クランそのものというよりはその分枝（「戸口(muyango)」））のメンバーを，彼との関係の遠い者から順にたて続けに殺していくのだという[26]。キラボを打つ者は，キラボを打つ際に，相手の集団のメンバーが全員死んでしまうと誰も賠償を払う者がいなくなってしまうというので，メンバーのうち一人が死ぬことのないようにキラボをうつことがあるという。この手続きを「棒を折る（ku-vunza chigongo)」という。

この種のキラボにも多くの種類がある。なかでも「バナナのキラボ（chirapho cha izu)」と「キリト（chilito)」はその進行の速さと，効き目の強力さで恐れられている。バナナのキラボでは，施術師は依頼者に死んでほしい人数分だけのついたモンキー・バナナ（izu ra chisukari）の房を用意するよう言い，それに対して唱えごとを行わせる。たとえばウシを盗まれた者の場合「もしそれが自分からいなくなったのなら，それまで。しかしもし人がそれを盗んだのなら，その一族（母系）全員，残さず死んでしまえ。」などと唱える。バナナの房を小屋の梁につるしておく。バナナが熟して，一本落ちるごとに一人死ぬ。一方キリトのキラボは，ドゥルマ固有のものではなく，カンバ人のキラボであり，その施術師もカンバ人であるが，同様にその効果の苛烈さで知られている。人の頭蓋骨にムハッソを詰めたものがキリトで，それを打ちつつ下手人の母系集団全員の死を唱える。キリトは妊娠中の女性から殺していくというので，とりわけ恐ろしがられている。

連続する死に気づき，不審に思った誰かが占いに行って，そこではじめてキラボのせいであるこ

とが判明する。メンバーが集まり，身に覚えのある者に名乗りださせ，キラボを打ったと思われる人のところに謝罪と賠償交渉に行き，キラボを解除してもらわねば，集団内で連続する死は止まらないとされている。キラボの死には特徴があり，耳や鼻から血を流すといった症状をあげる者もいるが，実際のケースではこれは必ずしも当てはまっていない。しかし同じような死に方が一つの母系集団内で続くときには，キラボが疑われるので早急に占いに赴きその原因を突き止めようとすることになる。上述の「バナナのキラボ」の場合などほとんど時間の余裕がない。一人が死に，その埋葬がまだ終わらないうちにもう一人が死んだという知らせが入ってくる。人々は不審に思い占いを打ち，このキラボが打たれたことがわかる。「集まった人々はお互いに尋ねあう。そして問題が露見すると，お金を出し合って（キラボを打った）人のところに駆けつける。というわけでバナナのキラボで死んだ人には服喪（hanga）は開かれない。」

2003年，近隣のムベガ（仮名，前出のムハッソのムベガの孫）の一族にキリトが打たれているという噂があった。全員死に絶えようとしているのに，何の手も打とうとしていないと。ムベガの甥（姉妹の息子）ニャレ（仮名）はトラックの運転手だった。いつものようにトラックに乗って出発しようとしたのだが，なんと荷台に二人の子供が乗り込んで，そのまま眠り込んでしまっていた。知らずにトラックを走らせたのだが，目覚めた子供たちはびっくりして高速で走っているトラックから飛び降りた。一人はその場で死に，もう一人も病院に運ばれそこで死んだという。ニャレは責任を問われず，二人の子供に対する死の賠償（kore）も支払われなかった。そこで二人の子供の父親がキリトを打ったというのだ。彼はカンバ人であった。

「そいつが言ったことには，『なるほど。でもトラックを運転していたのは人じゃないかい？ もし車がひとりでに走って子供たちを殺したというのなら，車は死ぬことはないだろう。でもそれを人が運転していたというのなら，そいつは自分の一族を滅ぼすだろう。』 ああ！ニャレの姉妹から始まった。女性親族からまず死んでいくのさ。ああ，あいつら皆死んでしまうよ。なのにあいつらはキリトを解いてもらおうとしていない。（たぶん知らないのでは？）知らないなんてことがあるもんか。カンバ人がそう言ったのは皆聞いていた。私もその場にいた。」

幸い母系女性親族のたて続けの死は二人で打ち止めになり，2008年の時点では，この噂も立ち消えになっていた。

キラボを解いてもらうことによって，一族の全滅が免れたとされるケースもある。調査地域の，カタンボ（仮名）一族に何十年か前に起きた出来事だという。カタンボ（仮名，前出のカタンボとは同名の別人）は警官で，税金未納で逮捕された男をロープで縛って連行していた。しかしその男は逃げ出し，雨季で増水していたキラジニ川を渡ろうとして溺死してしまった。遺体は親族によって４日後に発見された。そこでキラボが打たれたのだという。

「『あいつが自分で死んでしまったのなら，それでよし。しかし彼が殺されたのなら，あんなふうにロープで縛られていたせいで死んだというのなら，ムァゴロ（ムァゴロは母系氏族の名称）のあの一族，彼らが滅んでしまうように。』 キラボはまずメンジラ（仮名）という女性を殺した。ついでベメリ（仮名）さんの奥さん，カウィラ（仮名）さんを殺した。カウィラさんの服喪がまさに開

かれているときに，当地のムァンダンダ（仮名）さんの妻ウェチャカ（仮名）が死んだ。カウィラの姉だよ。牛乳を攪拌（バターを取るために瓢箪に入れて振る）している最中に倒れて，その場で死んだ。そこでキラボではと人々は思い当たった。占いに行って，溺死した男の親族にキラボを打たれたとわかった。もう何人も死に絶えてしまった。悲しいことだ。しかし生き残った者が集まり，そこに男が呼ばれた。男がやってきて言うには『よくぞお招きくださった。というのは後９日で，あなた方のベンデグゥ（仮名）も死ぬところだったのです。ベムリベ（仮名）さんについては棒を折ってあったのですが。』賠償を支払う人間を生き残らせるために棒を折っておくのさ。」

死の賠償（kore）が支払われキラボは解除されたという。私の目には死んだ男の自業自得とも思えるのだが，キラボが下した判断は違っていたらしい。責任のない者から死んでいくというのは，とんでもないとばっちりのようだが，まさにキラボが恐ろしいのはその点にある[27]。

キラボが打たれるという可能性だけでも，賠償を促す効果がある。2003年，エッガ（女性）の兄が近隣の人々から妖術使いの嫌疑をかけられ，最終的に試罪施術によって妖術使いであることが確定した。この結果を聞いた近隣の人々は，彼の屋敷を収穫されたトウモロコシもろとも焼き払った。さらに彼らは彼を探し出し鉈で殺害しようとしたが，彼は遁走し行方知れずとなった。困ったのは彼の母系親族たちで，彼の妖術で殺された者の親族が支払われるべき死の賠償（kore）を求めて自分たちにキラボを打つ可能性がある。そこで残された母系親族で金を出し合って共同で賠償を支払うことになった。エッガの成人した息子たちにはそれぞれヤギ一頭の割り当てがなされ，相手の親族に対する賠償の支払いが開始された。

ヤシ酒売りのバカリ（仮名）は，商売道具の大事にしていた自転車 ── ヤシ酒の産地からヤシ酒をポリタンクに詰めて運んでくるのに自転車はなくてはならない ── を，就寝中に盗まれた。小屋の入り口に止めてあったのだ。バカリは，近所の誰かの仕業としか考えられないと暗い顔をして毎日うろつきまわっていたが，ある日思いつめた様子で私に借金の申し込みにやってきた。遠くのM町まで行ってそこの施術師がもっている強力なキラボを打ちたいというのだ。いくら正当な手段だとは言え，殺人とみなされうるものに私が資金援助したという話が万一広まっては困るので私は断り，近所の者の仕業だとすればキラボを打つという脅しだけで十分ではないかともちかけた。バカリはこの提案には不満そうで，結局それを実行にうつさなかった。普通は人はキラボを打ちにいく場合，そのことを周囲に吹聴してまわったりしない。むしろ人に知られないように行うものだという。キラボを打ちに行くことが前もって相手に知られてしまうと，相手にどんな手を打たれないとも限らないからである。キラボが打たれたという事実は，つねにそれが引き起こした結果によってのみ知られることになる。バカリがどこかから必要な金を入手してキラボを打ちに行ったのかどうかはわからない。その年（2008年）の調査を終えて帰国する時点では，彼はまだ自転車を取り戻せずにいた。

キラボは本当に効くのだろうかという疑問をお持ちの方もおられるかもしれないが，それに対しては，効くわけがないだろうと答えるしかない。バカリがどうしたかはわからないが，損害を受けた個人の怒りが大きい場合，資金が許せばキラボを打とうとするだろう。しかし ── どんなキラボ

にしても実際には信じられているような効果をもっているわけではないので ── 彼が期待した結果を手に入れる可能性は低い。一方，たまたまたて続けの不審な死に見舞われた母系集団は，占いの結果を受けて自分たちの犯したかもしれない罪を数え上げ，キラボを打ったに違いない人物を特定し，賠償と引き換えにその解除を求めに行くだろう。しかしその当の人物が実際にキラボを打っていたかというと，おそらくその可能性はそう大きくない。この二重の不在という構造は妖術についてもそのままあてはまるので，後に詳しく考察することにしたいが，ここでは次の点だけ指摘しておこう。キラボに効果がなくても，人々にとってもそれは驚くには当たらない。相手がキラボが打たれるだろうと考えて，前もって手を打っているかもしれないからだ。妖術使い，つまり強力なムハッソをもっていれば，キラボの攻撃をかわすことくらいは簡単であり，だからこそキラボを打ちにいく者は，そのことを知られてはならないのである。キラボの解除を求められた方はというと，たとえ身に覚えがなくても，自分がキラボを打ったことを認めて喜んで賠償を受け取るだろう[28]。

４－４．試罪施術

同じくキラボという言葉で呼ばれる第三の範疇に属するものに，試罪施術がある。これについての詳細は妖術告発との関係で独立した考察が必要となるので，ここでは簡単な紹介にとどめたい。係争において対立する両者の言い分が食い違い，いずれが真実であるか話し合いでは決められない場合に，白黒つけるために行われるのがこの施術である。さまざまな種類が知られているが，私の調査地域で行われているのは「パパイヤのキラボ（chirapho cha payu)」と「鉈（tsoka)」の二種類のキラボである。「パパイヤのキラボ」は非常に権威あるものとされ，妖術告発において最終的に真偽の決着をつけるのに用いられている。それを行うことのできる施術師は二人いるが，そのうちの一方が圧倒的に有名で，隣接するギリアマ人たちも妖術問題の決着のためはるばる彼の施術を受けにやってくる。その料金も高い。1990年当時は800ケニア・シリングであったが（当時のレートで約4000円)，現在は1500シリングに値上がりしている。他方の「鉈」は，妻の浮気の有無のようなより日常的な問題でも比較的気軽に利用できる。料金も数十シリングですむ。

「鉈」のキラボを受けることを，「鉈の場所に入れられる（ku-tiywa tsokani)」という。両当事者とも薬液（vuo）で手を洗うよう言われ，順番に手のひらを火中で熱せられた鉈で６回切りつけられる。鉈（tsoka）と言うものの，私が見たのはナイフを用いるものだった。真実を告げている方の者は，この施術で火傷ひとつ負わない。虚偽の主張をしていた者は，手ひどい火傷を負うことになる。

妖術告発であっても，女性同士が行うものはそれほど深刻にはとりあわれない傾向があり ── 女性は分別が足りないので根拠もなくすぐにかっとして告発をしてしまいがちだと考えられている ── 「鉈」のキラボへ送られることがある。ある女性は，自分の子供が生まれてすぐ死んでばかりなのは，姑が自分の子供たちに妖術をかけているからだと夫を責めた。夫は自分の母にこの嫌疑を伝えたが，母は否定した。そこで夫は，母と妻の双方を「鉈」のキラボに送った。最初に母が施術を受け，無傷だったのを見て，妻の方はおびえて泣き出した。妻の嫌疑が間違いであることがこう

して証明された。

「パパイヤのキラボ」では，まだ熟していないパパイヤの実を４つに切り，その各々にムハッソを塗り，一切れずつそれぞれの当事者に渡され，両当事者はそれを口の中でよく噛み砕くよう言われる。真実を主張していた者は何事もないが，虚偽の主張をしていた者の唇が腫れ上がりひりひり痛む。放置すると死ぬとされているので，唇が腫れた者はあらためて真実を告白してキラボを解除してもらわねばならない。

いずれのキラボについても，当事者の各人がキラボに対しておこなう唱えごとは，同じフォーマットに従う。妖術告発であれば，出来事について詳しく述べた後に「もし私が彼に濡れ衣を着せているだけで，彼は妖術使いではないのなら，キラボよ私を捕らえよ。しかしもし彼が事実私の妻を殺した妖術使いであるなら，キラボよ畑へ行け（＝私には手を出すな)。」と唱える。同様に，告発された側も「もし私がうそをついており，私が事実妖術使いであるなら，キラボよ，私を捕らえよ。だがもし私が濡れ衣を着せられているだけなら，キラボよ畑へ行け。」[29] と唱える。それぞれがキラボに対して，もし自分の主張が真実でないなら自分を捕らえるようにと唱えるのである。

４－５．キラボと妖術

いずれもキラボと呼ばれるこの３種類の施術は，一見すると内容的にはあまり共通するものはないように見える。しかしムハッソをどうコントロールするかという観点に立つと，共通の特徴が見えてくる。とりわけ妖術と対比させてみたときに，それははっきりする。たとえば，第一のタイプのキラボと妖術との違いについて考えてみよう。とりわけテーゴのように同じムハッソでこの二つの使い方が区別されている場合，その違いは何か。一方はその正当な使用で，他方は悪事を目的にした使用である，というのが自明な答であるが，それはあまりにも素朴すぎる。この二つの用い方の最大の相違は，ムハッソに対するコマンドのいわば構文の違いである。妖術使いは，特定の個人を攻撃するようにムハッソに命令していると想像されている。つまり「誰某を ── あるいは誰某の一族や誰某の屋敷を ── 捕らえよ」という形で，具体的なターゲットを目的語に指定したコマンドを用いている。それに対して，盗難などを防ぐためのキラボにおいては，コマンドは別の構文に従っている。ターゲットは特定の個人というよりは，特定の行為である。「もし誰かが，しかじかの行為 ── 作物の摂取とか女性との性交とか ── を行えば，その者を捕らえよ。」という形で，条件を設定しその条件にあう者をターゲットにするという構文になっている。

同じことは，第二の損害に対する賠償を促す施術としてのキラボについても言える。一応正当な行為とされてはいるものの，容赦なく相手の死を求める点でも，それが罪のない者に降りかかるという点でも，おそろしさにおいて妖術とよい勝負である。ここでも再び妖術との違いは，そのコマンドの文法にある。妖術のように単に「誰某を（あるいは誰某の一族を）捕らえよ」という形で命令するのではなく，たとえば盗難の場合であれば，「もしそれが自然になくなったのではなく，誰かがそれを盗んだのであれば，その者（の一族）をとらえよ」という形で，それは発動される。

試罪施術のキラボにおいても，同じである。ここではターゲットは特定の個人，つまり自分自身

であるが，それは明示的な条件分枝をともなう。「もし私の主張が誤りであれば，私を捕らえよ，私が真実を述べているのなら，私を捕らえるな」というわけである。

３つのタイプのキラボにおいては，いずれもムハッソに対するコマンドのなかに，なんらかの条件節が埋め込まれている。それがキラボをまさに特徴付けるものなのである。キラボとは，条件によって処理を分岐するタイプのコマンドによってムハッソをコントロールする施術だといえる。そしてこのような構文によるコマンドを受け付けるムハッソが，単に妖術にだけでなく，キラボにも使用できるテーゴのようなムハッソだということになる。

５．ムハッソの想像力

ムハッソはありとあらゆる仕方で人に危害を加えることができる。犠牲者のあらゆる内臓を切り裂き，心を曲げ分別をかき乱し，犠牲者のキブリを捕獲し，人々を仲違いさせ，係争中の問題をうやむやにしてしまう，などなど。その他，瞬間移動，透明になること，動物への変身，銃弾や刃に対する防御能力，人に富をもたらすことすら可能だ。しばしば，大きな代償 ── 親族の死など ── と引き換えにしか手に入らないということを差し引いても，ムハッソにできないことなど何もないかのようだ。

この地方で携帯電話が大ブレークする直前，人々は妖術使いの「モバイル」について面白そうに語っていた。それはアフリカマイマイ（大型カタツムリの一種）の殻なのだが，妖術使いたちはそれを使ってどこにいても互いに連絡を取り合うことができるのだというのだ。誰が言い出したのやら，よくも考えつくものである。さらには，誰某さんの小屋の後を通ったとき，中から「ハロ，ハロ」といってなにやらしゃべっている声がする。来客がいるのかと思って，戸口に回って声をかけると中の声はやみ，誰某さん以外誰もいない。ベッドの脇にはアフリカマイマイの殻が置いてあった，などという噂話までもっともらしく聞かされた。冗談としか思えない話で，人々も面白い話として楽しんでいる風ではあるのだが，まったくありえない話だと考えている風でもない。もう何でもありである。

ここまでの話を読んだ読者の中には，こうした不思議な術なら魔導師やら妖精やら怪物やらが活躍する御伽噺やファンタジー物語のなかでなら，ありふれた趣向であるという印象をもった方も多いだろう。それらは単なる想像の産物にすぎない。我々のあいだでは，ファンタジーを現実と取り違えたり，ファンタジーの中に描かれている行為が現実にも可能だと考えたりする者は，おそらくほとんどいないだろう。

とすると，こうしたことが現実に可能であると考えている人々は，単にファンタジーと現実を混同したり，御伽噺を真に受けてしまっている人々だということになるのだろうか。「未開人」とはこんな人々だろうと，誰もがかつて ── 今でも？ ── 想像していたような「未開人」であれば，おおいにありそうな話である。「妖術信仰」の存在が，植民地時代から現代に至るまでしばしば人々の未開性，後進性，蒙昧，「信じやすさ」などのサインとなっていたのも無理もないことである。

しかしそう考えることは誤りである。妖術についての人々の諸観念は，それが想像的なものであるとしても，「ファンタジー」とは別種の想像力の領域に属しているからである。それを理解するためには，それぞれの社会空間において人々が生きている「現実」そのもののがある意味で想像的なものでもあることの確認からはじめるのが良いかもしれない。人々は，自分たちの住む世界がどのような世界であるか，そこにはどのような物や行為主体が属しており，普通どんな風にことが進行しどんな結果に終わるか，その世界では何が可能で何が不可能であるか，等々についての想定をおこなっている。人々にとっての「現実」とは，まさにこうした仕方で人々が想像＝思い描いているところのものに他ならない。この現実構成的想像力が「現実」をどのように描いているかに応じて，そこではどんな戦略が割に合うかも規定されてくる。人は不可能だと思っていることは普通やろうとせず，可能で割が合うと思っていることにしか手を出さないだろうからだ。そして，そうした戦略に従って行為することが，結果的に現実を人々が思い描いているとおりのものとして再生成していくような回路が成立している度合いに応じて，想像された「現実」は事実性，恒常性を手に入れることになるだろう（詳細は浜本 2007a，b，2009 の議論を参照のこと）。こうした「現実」に対して，「ファンタジー」は上記の現実構成的想像が，不可能の領域に排除している事柄を対象に働く想像力の一種である。「現実」世界では絶対おこりえないこと，不可能なこととされたものの一部に対して，舞台や小説など枠付けられた別の現実のなかで一時的に具体的な姿をとらせる，これがファンタジーの想像であり，この想像は最初から「非現実」であることが了解されているのである。人々がファンタジーの想像を楽しむことができるのは，あくまでもそれが現実と明確に区別され，枠（フレーム）つけられた世界の内部にいる限りにおいてである。

言うまでもないことだが，ムハッソの常軌を逸した効能を現実的な可能性として語る人々は，ほとんどあらゆる点で我々とまったく同じく，常識的でしたたかで合理的な損得計算に長けた人々である。そして彼ら自身のファンタジーを別にちゃんともっている。ドゥルマの民話の中には，怪物たちやそれに食べられてまた生き返る主人公や，彼が乗り回す空飛ぶ編み籠の話やら，殺されて皮をはがれて太鼓にされそのリズムによって殺害者の正体を暴露する登場人物やらで溢れているが，そうしたファンタジーを現実と取り違えたりする者など誰もいない。妖術とムハッソの観念は，けっして現実と混同されたファンタジーや真に受けられた御伽噺の類ではないのである。

ではムハッソとその効能の現実性は人々にとっての「現実」の一部，我々にとって自動車やテレビがそうであるように，彼らにとって存在することが当たり前のリアリティそのものなのだと言ってしまってよいかというと，これもおそらく誤りである。なぜなら，それらは人々にとっても「不思議（virimo，vilinje）」に属する事柄，人々の常識で理解できる仕方からは外れた仕方で，通常のやり方では期待できないようなことを成し遂げることだからである。現実構成的想像は，人々の住む世界がどのような世界であるか，その秩序 ── そこでは何が可能で，何が不可能か，何をすればどうなるのか ── を描き出す。それに対して，ムハッソを取り巻く観念はその秩序からの逸脱へと人々の目を向ける。現実ではありえないことが明らかなファンタジーの想像力に対して，それは可能性と不可能性の境界，秩序とその外部の境界線上に働く想像力に対応しているともいえる。

我々の眼に「神秘的」「儀礼的」とうつる人々の観念が，すべてそれに属するというわけではない。父や母が子供の振る舞いに対して内心で憤りを覚えると，彼らの意図には関係なく子供にさまざまな危害が及ぶという観念に見られる連関は，我々日本人には神秘的，象徴的に映るかもしれないが，ドゥルマの人々にとっては親族関係の中に当然内在する常識的な連関である。屋敷の内部の人々が性的に「まぜこぜ」になることが，屋敷にさまざまな災いを引き起こすという連関も，同様に人々にとっては当たり前のことであり，これらはいずれも現実構成的想像の領分である。

ムハッソをめぐる想像力は，それぞれの社会において現実構成的想像が描き出しているところのこの秩序 ── それは社会ごとに多様でありうる ── に対して働きかける想像力である。現実構成的想像が排除する非現実的でありえそうにないものの一部は夢物語やファンタジーとして至高の現実とは区別された別のリアリティの枠の中に安全に囲い込まれているが，一方で可能性と不可能性の境界線を外に向かって押し広げることによって，それらを再び現実の領分に招き入れようとする想像力が存在している。それは科学的想像力に似たところがないわけではない。ともに可能性と不可能性の，ありとあらゆる方向に向かって延びている境界線の上に働き，そのいたるところで戯れる想像力であり，秩序が知らなかったやり方で，秩序の想像がそれまで認めていなかった連関の実現を夢想する。「話としては面白いけれど，そんなことありえないから」から「まさかとは思うけれど，もしかしたら起こりうるかもしれない」，「私は知らないが，そうしたことを起こす方法があるのかもしれない」などを経て，「そうしたやり方がきっとあるに違いない」に至る距離は，しばしば思ったほどに大きくない。話を一攫千金の大儲けや，西洋近代医療とは別のやり方での奇跡的な治療方法といった領域にとれば，日本にいる我々にも思い当たる節があるはずだ。

もし妖術において問題になっている想像力が，秩序の境界において働くこの種の想像力であるとするならば，ムハッソがブッシュで自生する植物を主な原料としていることも意味のないことではない。文化的な秩序が支配する屋敷の空間に対して，ブッシュは秩序の外部の無秩序としての象徴価をもっている。この対立はムハッソの観念の中で重要な意味をになっている。すでに引用したムハッソ作成に当たっての唱えごとのなかで，採集する植物に対して次のように唱えられていたことを思い出そう。「汝ムバレよ。汝，ブッシュにいる者よ。今，こうして私はお前を連れにやってきた。これからは屋敷にあれ，汝ムバレよ。」ブッシュに由来し，過度に調理されることで施術師や妖術使いの制御下に置かれたものがムハッソである。それは秩序の境界に対する想像力を活性化するのにうってつけなのかもしれない。事実，ムハッソについてここまで述べてきた事実を見れば，ムハッソの概念は，秩序の外部に対する人々の想像力を文字通り炸裂させている ── 暴走させているとまでは言わないにしても ── のがわかる。

6．まとめ

ムハッソは妖術，および妖術の治療施術に用いられるとされる「薬」の一種である。ムハッソは妖術信仰の中核をなしている要素であり，妖術が引き起こすさまざまな不思議の多くはムハッソの

力に帰す。ムハッソに関する知識は，常人が容易に知りうるものではなく，その知識を手に入れた者は，妖術使いになるか，妖術使いに対抗する施術師になるかということになる。

ムハッソの多くは，ブッシュに自生する植物を屋敷に持ち帰り，炭化するまで炒めた黒い粉末である。これはブッシュの無秩序の力を，過剰な調理により制御化に置く手続きとして解釈可能である。

ムハッソは，その正当な所有者によるコマンド（唱えごと makokoteri）によって効果を発揮するという点で，誰にでも利用可能で，また誰が使っても同じ効果をもち，その使用にコマンドが必要とされない医薬品や毒，その他の伝統薬とは明確に区別される。

妖術では人に危害を加えるムハッソの側面が強調され，また多くのムハッソはもっぱらそうした用途以外の用い方があるとは考えられていないが，ムハッソの中には善悪いずれの目的でも用いられるものがある。ムハッソの正当な使用にキラボがあるが，それは妖術に用いうるムハッソを，妖術とは異なるコマンド構文 ── 条件節を含んだコマンド ── で用いたものである。

ムハッソとその効用は，我々なら非現実的なファンタジーの一種とみなす類の想像の産物であるが，何をもってファンタジーとするかは，それぞれの社会空間において働いている現実構成的想像力のあり方によって決まる。ここで述べたような妖術をめぐる諸観念は，ドゥルマの社会空間においては，ファンタジーではなく（ドゥルマにはドゥルマのファンタジーの領域が別にある），現実構成的想像力が描き出す，秩序とその外部，可能と不可能の領域の境界線上に働く想像である。

こうした特異な想像力の配置が，彼らの社会空間のどのような特徴に由来するもので，どのようなメカニズムで維持されているのかを明らかにすることが，次の課題である。

註

（1）　人々のなかには，しばしばこうした知識を，西洋の科学技術に対応するアフリカの科学技術（teknoloji ya chiAfrica）だと喩えてみせる者もいる。西洋の科学技術が「発展（maenderero）」のためのものであるのに，アフリカの科学技術は人々を破滅させ，発展を妨げるためのものばかりだと卑下する。しかし西洋の科学技術と同様，驚くべきさまざまな結果を生み出すことができるというのである。

（2）「薬」をこうした医薬品と，この地方の施術師によって用いられるそれ以外の薬に分ける言い方がある。前者を「政府のダワ（dawa za serikali）」，後者を「土着のダワ（dawa za chenyezi）」と呼ぶ呼び方がそれである。これは西洋近代／土着の区別に着目した区別であり，ムハッソは後者の一種だということになる。この場合，土着のダワには，単純な誰でも自家処方できる薬草の類や，狩猟などで用いていた毒なども含まれる。

（3）　ムヒ（薬）の３タイプは，必ずしも３つのタイプの治療において排他的ではない。「冷やし」を専門にする施術師であれ，憑依霊を専門にする施術師であれ，なんらかのムハッソを使用する場合があるし，材料を生のまま利用する薬液も，３つのタイプの施術のいずれにおいても用

いられる場面がある。しかし，それぞれの施術でどれが中心的な処置において用いられるかに関して言えば，その違いははっきりしている。たとえば，妖術による災いを治療する施術において中心となるのは黒い粉ムハッソによる処置であり，薬液は治療の最終段階で，患者の汚れを取り除き冷やすのに用いられるといった具合である。

（４） カウマはドゥルマと同じミジケンダの９集団の一つである。

（５） これらの話のなかで妖術使いとして語られるのが，話しての身内ですでにこの世にいない人物である場合はなおさらである。Ｃ氏の変身譚については，それが語られていたのはＣ氏の存命中で，当時Ｃ氏は別のもう一人の老人と並んで，この地域でもっとも厄介だと思われ，厭われていた妖術使い被疑者であった。この話自体は，むしろＣ氏の妖術を知恵と勇気で跳ね返したＫ氏の自慢話として聞かれるべきものだろう。

（６） この手の話を作り話ではないかと思う読者も多いだろう。私自身，こうした話を聞かされるたびに，それが本当にあったことなのかどうか何度となく疑わしく感じてきた。しかし人が物語ることを，つねに事実についての報告として捉えることは適切だろうか。裁判の証人席ではないのだ。人の語りはつねにパフォーマンスで，そこでは語り手は自分がどういう人間であるか，自分の人となりや，欲望，人生への姿勢を提示するために語ってもいるのである。実際にあった事実の忠実な報告かどうかだけに目くじらを立てるのは，的外れなのかもしれない。バンダ氏の語りの真実は，富と人生の成功を求める若者であったバンダ氏自身にとっても，一時は切実であったムハッソ使用の誘惑のリアリティにある。仲間と強力なムハッソを求めてタンザニアへ旅したことは実際の体験であったのかもしれない。そしていざ実際にムハッソを手に入れる段になって，尻込みしたことも。木の根を切断して施術を完了させることが，同時に大きな代償をバンダ氏が支払うことを意味していることが了解事項であった場合，その木の根に母親の顔が実際に現れたかどうかなどということは，単なる些細な ── しかし確実に話にいっそうの魅惑と訴求性をもたせる ── ディーテイルにすぎない。

このエピソードはまた，後述する「キブリの妖術」についての共通知識を背景になりたっている。このエピソードを聞けばこの地域の人々なら誰もが，この施術師がまぎれもなくキブリの妖術使いで，彼が木の根のところにキブリの妖術の一種を使って呼び寄せたのはＢ氏の母親のキブリに他ならないことを理解する。またキブリは切断されるとその持ち主を死に至らしめるというのもその背景知識である。

（７） 実は，自分が妖術使いであるとまでは言わなくても，人に危害を加えるムハッソを使役することができるとほのめかす者は存在する。彼らは，それを周囲の人々を威嚇し，恐れさせる目的でほのめかすのであり，ある程度は期待した効果をあげる。しかしこれはその男にとっては，最終的には非常に高くつく賭けである。彼は人々の間での病気や死に際して告発されるリスクを高め，後述するように何年かに一度のペースで勃発する地域あげての妖術使い狩りでターゲットにされてしまう危険を冒していることになるからである。にもかかわらず，周囲の人間に自分を恐れさせるという目先の効果につられて，こうしたこけおどしの威嚇を行う者が皆無では

ない。だからといって，彼らが実際に妖術のムハッソを持っているということではないし，仮に持っていたとしても，その使い方などを聞いたところで答えてもらえる可能性はまずない。また，後に論じるように，これだけムハッソについての話が流通していれば，誘惑に駆られて実際にムハッソを手に入れ，それで憎い相手をなんとかしてやろうと思う者たちが出てきたとしても，まったく驚くにはあたらない。そしてそうした要望にこたえる闇市場があることにも，私はうすうす気づいている。だが，彼らは逆に自分がやろうとしていることを人に知られぬようひた隠しにするはずなので，同様に，情報源にはなりえないのである。

(8)　これらの「木」の名前は，「施術上の名前（dzina ra chiganga)」であり，その植物が一般の人々にその名で知られている名前ではない。したがって施術師がムサヴラと呼ぶ木が，ブッシュに生えているどの木のことなのかは通常の人には知りえない彼らの専門的知識に属する。

(9)　ムハッソやその成分についての知識が，代金を払うことによって誰から誰に与えられたのかについての来歴が唱えごとの中で詳しく語られることには，後述するように大きな意味がある。代金を払って正式に購入しなければ，人はムハッソをコントロールすることはできない。盗んだのではなく，ちゃんと代金を払ったと告げることで，ムハッソにその施術師が正当な主人であることが示される。彼の発するコマンドが有効になるのである。施術師のある人々が，施術を自分自身やりたいというわけではなく「単に言葉（maneno）として知りたい」のだと表明する私のような者に，安心してその成分や呪文を教えてくれるのは，私がこうした対価を支払わない限り，そうした知識だけでは私はムハッソにその効果を発揮させることができないことがわかっているからである。

(10)　多くの人は，瞳を覗き込むとそこに人の姿が見える，それがキブリだというが，これはどう考えても覗き込んでいる人の反射像で，光線状態にもよるだろうがたいてい見えるはずだ。懇意にしている施術師数名によると，彼女らは瞳のなかにきらめく光の反射のようなもので判断している風である。また別の施術師によると，キブリを奪われた人の目を覗き込んでも，そこに施術師の影は映らない。目の前で手を振ってみても，瞳の中には何も映らないのだという。

(11)　妖術に対抗する施術は，ほとんどの場合近隣に知られぬよう密かに行われるので，そもそも立ち会う機会は少ない。数少ない懇意にしている施術師に同行するか，調査者と特に親しい── たいていは調査者が身を寄せている屋敷内部の患者や，屋敷の人々の親族の一部にほとんど限定される ── 者が施術の対象になっている場合，あるいは稀なことだが，調査者が施術の資金援助をしている場合 ── これも多くは金だけ出させられて施術は調査者には告げずにこっそり行われてしまったりするのだが ── ，あるいはさらに稀なことだが，まったくの偶然で訪問した屋敷でまさにその施術が行われようとするところに遭遇する場合くらいしか，施術に立ち会うチャンスはない。とはいえ，深刻さにおいては同様な他の施術（たとえば後述するフュラモヨに対する施術）のなかには，飽きてしまうほど何度も立ち会ったものがあることを考慮に入れると，キブリの施術の頻度自体が少ないのだと判断してよいと思う。自信はないが。

キブリの瓢箪を用いたとされる妖術とその治療施術そのものにとってかわったものとして，

鏡や，椀に張った水の中に殺したい相手のキブリを呼び出して，それをナイフで切るという妖術が話題になっている。この妖術は，海岸部のイスラム教徒やタンザニアの施術師が得意なのだという。

(12)　死者は小屋の中で全身の毛を剃られ，洗われて白い布に包まれ，寝台を逆さまにし周囲を腰布でしっかり覆った輿に乗せられ，６～８人の若者に担がれて埋葬地まで運ばれる。

(13)　殺害するというと穏やかではないが，施術師の場合には実際のところ以下のようなことなのではないかと，私は考えている。ムハッソやムヒのなかには，それを入手すると身内に死者が出ると考えられているものがいくつかある。「冷やしの施術」つまり屋敷の秩序修復の施術に関係するムヒにもその手のものがある。「死の施術」として知られている死者の埋葬や服喪明けの手続きにかかわる施術は，それを獲得すると，配偶者に死なれてしまうと言われている。それゆえ，すでに配偶者に死なれた者だけが，その施術を学ぶことができるとされている（浜本 2001:375)。キブリの施術の場合は，それを獲得するためには親族を殺さねばならないので，この「死の施術」とは前後関係が逆になっているように見える。しかし，実際には似たようなもので，近親者に死なれたばかりの者がそれを機にキブリの施術を入手しようとするということなのかもしれないし，あるいは，キブリの施術を入手する者は，その瓢箪を用意しつつ，近親の誰かが死ぬのを待って，その瓢箪を完成させるということなのかもしれない。キブリの施術師と知り合いになって，ぜひ尋ねてみたいところである（おそらく答えてはもらえないだろうが)。

(14)　私が偶然居合わせたこの施術の結果，患者は幸運にもその後健康を取り戻した。高額治療の甲斐があったわけだ。もちろん施術が患者に回復をもたらさないこともあるという。その場合は，患者はキブリを奪われただけでなく，別の形でも攻撃を受けていたのだということになり，さらなる治療が求められるかもしれないし，別のエージェントの関与が疑われるかもしれない。

　この施術は，キブリの妖術の治療のもっともよく知られたやり方であるが，キブリの妖術の種類によっては別のやり方がとられることもある。ムコモの場合，患者はブッシュの中に墓穴のような穴を掘り，その中に死体を包む布で巻かれて横たわる。施術師の合図で彼は墓穴から忍び出る。居合わせた人々は彼を見てはならない。ついで彼は木を組んでその場でしつらえられた台の上に，再び死体を包む布をまとって横たわる。そしてその周りで人々は埋葬を待つ死者に向けて歌い踊られるムセゴを演奏する。その後，彼にキブリが戻される。死から埋葬にいたる流れを逆回しにして見せている。もちろん話して聞かされただけで，この治療を実際に目撃したことはない。

(15)　祖母は，この孫息子（彼女の死亡した娘の息子）が実際に盗みを働いたかどうかに関してはなんの疑いも持っていなかった。もちろん盗んだのである。彼が逮捕されるまでの一週間あまり，彼女はむしろ彼の盗みに対して，店の所有者がキラボの呪詛（後述）を打ち，それによって彼女の属する母系集団が死に絶えるのではないかと真顔で心配していた。しかし言うまでもなく，身内を護るためにはあらゆることをせねばならない。フサは，同様な状況でのほとんど

のドゥルマの人々にとってと同様に，当然の手段であった。この近隣にいるフサの施術師Ｍｒ氏は，ドゥルマの男には珍しく物腰が柔らかく礼儀正しい老人で，そのあまりの腰の低さに私自身とまどったほどの人物であった。しかし，にもかかわらず，彼は近隣の人々から妖術使いだと看做されていた。明らかに彼が所持する多数のムハッソ，とりわけフサのムハッソの故である。実際，2006年にこの地方で起こった妖術使い狩り運動のなかで彼は捕らえられ，その正体を暴かれたと聞いている。

(16)　実際，上述のツァムラを，後述するフュラモヨの一種であると語る人もいる。

(17)　こんなことはありふれたことだ。俺だってそうだとおっしゃるあなた，あなたはもしかするとすでにこの妖術にかかっているのかも。

(18)　ムコネはドゥルマで「冷たい木（muhi wa peho)」と分類される，「冷やしの施術」で広く用いられる木で，実をつける雌の木と実をつけない雄の木の二種類がある。ムコネ・ウチェは雌のムコネである。

(19)　ドゥワの妖術は，どんな種類の妖術があるかという質問に対して，人々が真っ先に挙げるいくつかの妖術のなかに入っており，冒頭のパラグラフで紹介した程度の説明を多くの人が行う。ドゥワの術にかけられる（ku-pigbwa duwa「ドゥワを打たれる」）という表現は，日常でも妖術の噂 ── 誰某の生活がめちゃくちゃになっているのは妖術のせいだという類の ── でもよく耳にする。しかし現実には，人々がドゥワに言及するケースの多くも後述するフュラモヨとして処理されていることが多い。施術師のなかにはフュラモヨを治療する際に，ドゥワも一連のフュラモヨの一種として唱えごとの中に組み込んでしまっている者もいる。

(20)　すでに説明したように，病気やさまざまな災難について，単に「ムハッソだ」と言えば，それが妖術によるものであると述べていることになる。

(21)　フュラモヨという名の憑依霊や，自己嫌悪（dzimene）という別名をもつ憑依霊がおり，それらの霊に憑依されると，同様な症状を示すとされている。

(22)　ヤモリ（mwafu）は日本にいるものと同種類にみえる。ただ夢を媒介する力があるとも考えられている風で，就寝時ヤモリが頭上の梁にとまっていて，そいつに見つめられると悪夢を見たりするといわれている。

(23)　人によってはンザイコをフュラモヨの種類の一つとして挙げる者もいる。その場合，全身が何かに這い回られているように痒い，心臓が「破裂」する（もちろん比喩である），などの身体よりの症状が強調される傾向がある。

(24)　これらの名称に使われている言葉の多くは，直接症状を指す言葉である。ガンジ（ganzi）は「痺れる」を意味するクファ・ガンジ（ku-fa ganzi）に由来する。ムコモはキブリの妖術の一種の名前であるが，それが引き起こす出血という症状から，ここで用いられているのだろう。カンジョンジョ（kanjonjo）については意味不明である。ムァンバニャマは草の一種で，この草の汁に触れると痒くなることから。

(25)　他にボラと呼ばれる者に，母系集団の女性たちが管理するキフドゥ（chifudu）とよばれる

壷をめぐる施術があり，彼女らもボラと呼ばれる（浜本 2001: 104, 267)。キフドゥのボラと同様に，バハシのボラも一種の結社をなしていた。またキフドゥのボラと同様，その死に際して特別なやり方に従う必要があった。ボラが死んでも，通常の死の場合と異なり，親族たちはただちにその死を泣き悲しむことが禁じられていた。他のボラ仲間が集まり，死体の周りで竹（mwanzi）で作ったムァンザ（mwanza）と呼ばれる笛の演奏を行い，それによって親族の号泣が許される。

(26)　ドゥルマは，ミジケンダ・グループのなかではラバイとともに二重単系出自にもとづく親族組織をもっていることで知られている。1950年代までは，主要な財産である家畜や現金などはすべて母系の継承ラインで相続されており，父系的に相続されるのは弓矢などの武器と当時は希少資源とは考えられていなかった土地のみであった。もっとも当時土地の個人所有の観念はなく，土地は父系クランが所有しており，ここでいう相続は父親が開いた土地を引き続き占有できるという程度の意味で，個々人はいくらでも新たにブッシュを開いて農地を手に入れることができた。1960年代に相続がすべて父系に改められた結果，今日母系集団が問題となる場面は，殺人の賠償 ── これも今日では関与する人々の範囲は狭まり，広い範囲の母系集団が関係してくることは稀である ── や，フドゥの壷が送りつけてきた病気の治療，そしてこのキラボにおいてのみである（浜本 2001: 30-32)。

(27)　キラボは動機の点でも，またそのあまりにもすさまじい効果の点でも，ときに妖術との境界があいまいになる場合がある。ヴィグルンガーニのメンザ（仮名）氏の一族のあいだで2003年に起こった連続死事件もそんな例の一つである。メンザ氏はヴィグルンガーニの交易センター（といってもキオスクや簡易食堂が数軒あるだけだが）でホテリ（簡易食堂）を営んでいたが，ある男を毒殺したという容疑をかけられていた。その男はメンザのホテリから帰宅した直後に血を吐いて死んだらしい。男の兄がメンザを問い詰めたが，メンザは容疑を否認。しかしほどなく，メンザの親族が立て続けに死に始めた。死者の数は５人にも上った。さらにナイロビで警官をしている若者と同じくナイロビにいた彼の母の姉妹にあたる女性が相次いで死に，先の５人目の服喪（hanga itsi）で親族たちが集まっているところに，この二人の死体が到着するという驚くべき状況に。占いの結果，どうやら弟を殺された兄によるキラボらしいと判明するが，占い師の言うことには，それを解除するには親族の妊娠している若い娘を殺し，その腹から胎児を取りだし，胸の上に置く必要がある。ここまでくると，キラボというには度をすごしており，人々からはこれは妖術だという声も聞かれた。人々が言うにはメンザ氏も強情（kani）で，自分の最初の毒殺をどうしても認めようとしないので，キラボを打ったと目される男に解除を願い出ることもできない。この事件は，2008年の時点でも解決していなかった。

(28)　キラボ解除の要求に対して，自分はキラボを打っていないと言い張ると，かえって立場がまずくなる。彼にキラボを解除する気がなく，その母系集団全員の死を本気で望んでいるのだと解釈されてしまうからである。キラボを打つことは許される行為だが，賠償の受け取りと解除を拒むことは邪悪な振る舞いである。

(29)「キラボよ，畑へ行け（enda shamba)」と言う代わりに「キラボよ荒地に行け（enda nyika)」と言ってもよい。「畑（あるいは荒地，あるいは海原）に行って野生ブタやイボイノシシ（あるいはシマウマやエランド，あるいはカジキ）等を食べよ」，つまり私には何もするなという，ムハッソに対する唱えごとの常套句の後半を省略したものである。

参考文献

浜本　満，1991,「マジュトの噂：ドゥルマにおける反妖術運動」,『九州人類学会報』 Vol.19: 47-72.

浜本　満，1992a,「ドゥルマにおけるコマの観念」，『九州人類学会報』 Vol.20: 33-51.

浜本　満，1992b,「病気の表情」波平恵美子編『人類学と医療』(講座「人間と医療を考える」４),
pp.70-93，弘文堂

浜本　満，2001,『秩序の方法：ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的実践と語り』，弘文堂

浜本　満，2007a,「イデオロギー論についての覚書」『くにたち人類学研究』 Vol.2 pp.21-41.

浜本　満，2007b,「妖術と近代 ── 三つの陥穽と新たな展望」阿部年晴，小田亮，近藤英俊（編）2007,『呪術化するモダニティ ── 現代アフリカの宗教的実践から ──』 風響社，第一部第二章 pp.113-150

浜本　満，2009,「進化ゲームと信念の生態学－社会空間における信念の生態学試論２－」,『九州大学大学院教育学研究紀要』 第11号（通巻　第54集）pp.125-150.

Imaginary power of 'medicine': The notion of 'muhaso' and witchcraft belief among the Duruma of the Coast Province of Kenya

Mitsuru HAMAMOTO

This paper is intended to be the first part of the ethnographic description of witchcraft beliefs and practices among the Duruma of the Coast Province of Kenya.

Use of medicinal substance, called 'muhaso' in Duruma language, is the core of the witchcraft beliefs and practices among the Duruma. The Duruma distinguish two categories of medicinal substances: 'dawa (a Swahili word)' and 'muhi (means "plant" in Duruma language)'. The former, including both ordinary Western and traditional medicines as well as poisons, are thought to be effective without invoking any verbal command (a spell), while the latter are such medicines as are only effective when accompanied by verbal commands by their legitimate owners.

Main ingredients of 'mihi' (plural of 'muhi') derive from various bush plants. 'muhaso' is a kind of 'mihi' used in witchcraft attacks ('utsai') as well as in treatments ('kulagula') of the troubles caused by witchcraft. Various bush plants are made into 'muhaso', scorched completely on the top of an iron sheet or a piece of pottery, ground into black powder. 'muhaso' can give its holder almost supra-human power. Witches are thought to have a vast knowledge of various 'mihaso' (plural of 'muhaso') — their ingredients and accompanying spells ('makokoteri' or 'marumi') — and to be able to produce almost every kind of miraculous events, most of which are harmful to other people, though. While many 'mihaso' are harmful in nature, some accepting different command syntax (using if-clause) are utilized as medicines for preventing thefts or for judicial ordeals. They can be called 'chirapho', which sometimes mistranslated as "oath".

I will show the imagination surrounding the notion of 'muhaso' should be seen as a kind of liminal imagination, playing on the borders between the real of the everyday life and the impossible, which is distinct from the simple imagination of fantasy, as well as from the imagination constitutive of what phenomenologists call the 'supreme reality'.